

ソークラテースのアイロニー⁽¹⁾

グレゴリー・ヴラストス

(古川英明訳)

「アイロニーとは」とクインティリアヌスは言う、「言われていることと反対のことが理解されなければならない」(*contrarium ei quod dicitur intelligendum est*)⁽²⁾ ような言葉の比喩的表現ないし用法である。彼の公式は時のテストに耐えてきた。それはそのままの形でジョンソン博士の辞典に取り入れられ(「意味が語と反対であるような語り方」(1755年)),そして実質的にはそのままの形で私たちの辞典の中に生き残っている。「アイロニーとは、その文字どおり(literal)の意味とは、別のことを、そしてとりわけ反対のことを表現するための言葉の用法である」(*Webster's*)。ここに、私にも作ることでできるまことに単純でつまらない例がある。イギリスからの訪問客が、どしゃぶりのなかロサンゼルスに降り立って、「ここは何て素晴らしい天気なんだろう」と言っているのが聞こえる。天気は悪い、彼は天気を「素晴らしい」と言い、それでいて、自分は言っている(say)のと反対のことを意味し(mean)ているのだということを何の問題もなく理解してもらえている。

どうして私たちは言葉にそのようなひねりを加えようとするのだろうか。その「文字どおりの」——すなわち、確立され、一般に理解される——意味とは非常に異なる、時にはその反対にもなりうることを言葉に意味させるというようにして、言葉をひねろうするのは何故なのであろうか。一つにはユーモアのため、また他には嘲笑(mockery)のためである。あるいは、もしかすると、その両方の理由からなのかもしれない。たとえば、次の場合がそうである。ジェラルド・フォード大統領がホワイトハウスの公式晩餐会にメイ・ウェストを招待したとき、彼女はこの招待を辞退しようとして、その理由を次のように説明した。「たった一度の食事に出かけるには、とんでもなく遠い距離ですわ。」この冗談は誰かに当てつけたものであり、辛辣な言葉であるのだが、知的な笑みに包まれることで社交上好ましいものになっている。

アイロニーの第三の可能な用法はこれまでほとんど注目されてこなかった⁽³⁾、名前が付いていない。実例を示すことでそれを確認させてほしい。ポールは、いつもはよくできる学生なのだが、今日はうまく行っていない。チュートリアル[個別指導の時間]をしくじって、チューター[指導教員]をひどく立腹させ、その挙句に悪態をつかせることになってしまった。「ポール、君は今日はまったく素晴らしい。」ポールは戸外の暗闇に押し込まれているような気持ちになる。しかしどうして? 自分は何かそんなにひどいことを

したのでろうか。取りとめのない話し方で、まとまりが無く、言葉づかいがずさんで、だらしく、文法違反をし、構文間違いをし、準備不足で、知識がなく、混乱し、一貫性がなく、支離滅裂であったのだらうか。これらの誤りのうちのどれのせいで自分は非難されているのだらう。彼は教えられていない。彼は謎 (riddle) をかけられ、それを独りで解く羽目になっている。アイロニーのこの形式は、たしかに普遍的ではないが、しかし、一見そう思われるほどに稀なのでもない。最初の例におけるようにアイロニーのきわめて拙劣な形式にだけ、それは完全に欠けているのだ。第二の例にはそれがわずかだけある。メイ・ウェストは私たちをからかうように、あの最高の招待を辞退する理由から逸らすのである。彼女はほめかしているのだ、「もしもあなたが全くのお馬鹿さんでないのなら、これが私の本当の理由でないことはあなたにも分るでしょ。それが何なのか、当ててごらん。」

アイロニーが謎かけであるとき、それは誤解されるのを覚悟の上で言われている。極端な場合、聞き手がアイロニーに全然気づかないということすら起こるだらう。もしもボールが愚鈍とも見えるほどに自惚れが強く、自己批判をひどく欠いた学生であったとすれば、彼はチューターの言葉に飛びついて、とにかく自分は何か素晴らしいことを言ったに違いないのだと考え、得意になったかもしれない。もしもそんなことになったとすれば、私たちは、話者の意向に反して欺瞞 (deception) が起きてしまった、と言いたくなるであらう。というのも、もしもチューターがアイロニカルに話すつもり (mean) であったとすれば、その場合には、彼は欺くつもりはなかったであらう。二つの意図 (intention) は両立しえないのである。初めの意図が実現される限りにおいて、後の意図は実現されえない。実際、欺こうとする意図がなかったことは、上の三つの例のすべてにおいて明らかだらう。そしてこのことがこれらの事例にたまたま備わった特徴であるというのでないことは、本稿冒頭の定義をもう一度参照することによって理解しうるのである。二つの意図が両立不可能であるというそのことから、次のことも導き出せる。それはつまり、もしも先の訪問客が誰かを、——例えば、ロンドンに残してきた彼の妻を——欺いて、ロサンゼルスロサンゼルスの天候はちょうどその時晴れていたと思わせようとするつもりであったとすれば、彼は電話で「当地の天候は晴れである」とアイロニカルに話してそうすることはできなかっただらう、ということである。というのも、「当地は晴天である」とアイロニカルに語るということは、「晴天」という言葉でその反対を自分の妻に理解させようと意図しつつ、その言葉を語るということであるから。もしも彼の妻がそのように理解したのであれば、欺かれることもないのである。ロサンゼルスロサンゼルスの天候はちょうどその時、「晴れ」の反対であったのである。

これは非常に基本的なことであるから、例をもう一つ出しても悪くはないであらう。ある詐欺師が指輪を手に入れたが、彼にはそこに嵌められた宝石がにせ物であることは分っていた。彼は人をペテンにかけてやろうと企み、「ダイヤモンドの指輪です、いいでしょう？」

(Can I interest you in a diamond ring?) と声をかけて回っていた。彼のこの言葉をアイロニーと呼ぶ人がいるとすれば、その人は、「アイロニー」という言葉の意味がまるで分

っていないことを自白しているようなものだろう。「アイロニー」の定義がその訳を教えてくれる。詐欺行為が成立するとすれば、「ダイヤモンド」の文字どおりの意味がこの詐欺師の伝達しようと意図する意味でなければならない。彼が「ダイヤモンド」という言葉をアイロニカルに使用しているのを私たちが見ようとするのであれば、この意図を彼がもっていないような事例を用意しなければならないであろう、——例えば、この詐欺師が自分の十歳の娘に、本心がどうしても現れてしまうような輝きを眼に見せて、「ね、ダイヤモンドの指輪だよ、いいだろう？」(Luv, can I interest you in a diamond ring?) というような事例。さて、彼がそのような合図なしに自分の娘に同じ言葉を言ったと仮定しよう。それでもこの言葉を「アイロニー」と呼ぶことはできるであろうか。彼は騙そうと試みているのでないと確信できる場合には、という条件を付けて、そのように呼ぶことはできるであろうと思われる。つまり、娘は五歳ではなく十歳なのだ、だから、もしもその装身具が本物のダイヤモンドの指輪であったとすれば、それは何千ドルもの値打ちがあるから、お父さんがそれを自分の見えないところへ置くわけがない、ということが分らないといけなんだ…。もしも私たちが、これが彼のしようとしていることであると、——つまり、彼は娘の知能と分別の程度を験してみようとしていると、考えるならば、私たちは依然として、先の言葉をアイロニーと見ることができるであろう。つまりこれは、謎かけという種類のアイロニーの純粋な見本である。仮にこの小さな女の子がその試験を不合格になったとしても、それはやはりアイロニーの資格を失わないであろう。というのも、あの発言は欺こうとする意図から為されたのではなかったのであるから。同様に例のチューターは、ポールがアイロニーに気づかずに非難を賞讃と誤解する恐れのあることをよく承知したうえで、「素晴らしい」と言ったのかもしれない、——このことを承知しつつ、ポールが誤解する機会を捕まえてやろうと、何か然るべき理由があって望んだのかもしれない。

以上のことを理解したうえで、私たちが古代ギリシアに帰り、欺こうとする意図は、アイロニーを表わす私たちの言葉[“irony”]と全然相容れなかったのに対して、その祖語であるギリシア語の *eirōneiā*, *eirōn*, *eirōneuomai* においては、普通 (normal) に認められるものであることを発見したときには、不意打ちを食らうことは必定である⁽⁴⁾。この相違は、*eirōneiā* 等がアッティカ原文伝存資料集に現れる最初の三つの文例——これらはすべてアリストファネスのものであるが——、この三つの文例において明白である。『蜂』174行では、ὥς εἰρωνικῶς は、フィロクレオーンが裁判人になりたいばかりに、嘘をついて家屋敷から自分の驢馬をつれ出そうとしていることについて言われている。『鳥』1211行では、それは、イーリスが鳥の国に入ろうとして嘘をつくことに対して適用されている。『雲』449行では εἶρων は、「ずるい」という意味の二つの語に挟まれて、「訴訟相手の狡猾な人間を罵る言葉のカatalog」⁽⁵⁾のなかに登場する。前四世紀になると、私たちは同じ用法にいっそう多く出会うのである。デーモステネース(『フィリッポス弾劾第一』第七節)は、この言葉を、退屈な市民的義務を逃れようとして言葉を曖昧にする市民について使用

している。プラトーンは『法律』(908E)において、異端者に対する刑罰を規定する際に同じ言葉を使用している。彼は偽善者を *eirōnikon* な種類の異端者と呼んでいる。彼らに対してはプラトーンは、死刑または死刑以上の刑罰を法によって定めている。しかし、偽善者同様に考えが誤ってはいても正直で率直な異端者は、監禁され訓戒を与えられた後に放免される。『ソフィステース』ではプラトーンは、ソークラテースの問答法をソフィスト術の優れた形式⁽⁶⁾であると断言しつつ、これを並みのソフィストが実践する、ありふれたソフィスト術と対比している。プラトーンがこの技術のうちの *eirōnikon* な種類に割り当てるのは、これらの人々である。ソークラテースではなく、彼の主要なライバルを、——プラトーンはこの人たちをペテン師と見ているのだが——、また *eirōnes* (268A-B) とも呼ぶのである。

eirōn の最もありきたりの用法では、それが不誠実を意味するものとしていかに定着し固定化していたかということは、アリストテレースとテオフラストスによる *eirōn* の描写を見れば分かるのである。*eirōn* は両者において非常に異なっていて、テオフラストスでは憎悪すべき人間、アリストテレース⁽⁷⁾では愛想のよい人間であるのだが、しかし、彼らの描写は一つの点では同じである⁽⁸⁾。というのは、いずれの *eirōn* も、自分を語る際にわざとと言い紛らすのである。アリストテレースはソークラテースについてはそのような偽り隠すこと (*dissembling*) を大目に見ている。彼はソークラテースに *eirōn* という役を割り振るのであるが、ソークラテースとは対極的な人物である自慢屋 (*alazōn*) と比較して、ソークラテースは比べようもない程に、はるかに魅力的であるとしている。それというのも、ソークラテースは自分には名声を博するような資質は具わっていないと言い立てて、しかも、それは「尊大さを避ける」という理由からそのように言っているのだが、この点をアリストテレースは好ましいとするからなのである (*N.E.*1127b23-6)。とは言え、注目すべきなのは、アリストテレースは好ましいとは見たものの、賞讃に値するとは見ていないということである。ソークラテースの人となり賞讃を表す場合には、彼はぜんぜん別の特性に移行している。つまり、彼がソークラテースを心の大きな (*megaloψυχος* *Po. An.* 98a16-24; cf. *D. L.* 6.2) 人と考えるのは、ソークラテースが運命のもたらす諸々の偶然的出来事に対して無関心 (*apatheia*) であったという理由によるのであって、*εἰρωνεία* の故では全くないからである。テオフラストスは *eirōn* を情け容赦なく批判している⁽⁹⁾。このような人物は計画的に人を欺くのであり⁽¹⁰⁾、胸くそが悪くなるほどに裏表があり⁽¹¹⁾、利己的な偽装に長けていると述べている⁽¹²⁾。

トラシュマコスも、ソークラテースの「いつもの」 *eirōneiā* に言及する、あの有名な箇所、彼をそのような仕方で見ているのである。

T1 *R.*337A: 「おやまあ」と彼は言った、「これはソークラテースのいつもの空とぼけ (*εἰωθυῖα εἰρωνεία*) だ。私はこの人たちにあらかじめ言っておいたのだ、あなたは答え

を拒むだろうとね、そしてあなたに質問しても、あなたは空っぽけ (εἰρωνεύσοιο), 絶対に答えはしないだろうというようにね。」

他人に質問しておいて、自分はその答えを持っていないとソクラテースが言うのは嘘である、とトラシマコス是非難しているのである。ソクラテースが答えを持っているのは全く確実なのだ。それなのに、彼はそれを秘密にしておきたいばかりに、自分を持っていないとうそぶいている。だから彼はわれわれの答えを攻めたててずたずたに引き裂いて、それでいて自分は攻撃から守られているから、大はしゃぎできるのだ。——トラシマコスはこのように抗議しているのである。だからこの *eirōneia* を “irony” と翻訳する理由は少しもない (ブルーム, グループ, ショーリー) ⁽¹³⁾。もしもそのような翻訳が正しい翻訳であるとすれば、嘘をつくことがアイロニーの標準的な形式であるということになるだろう ⁽¹⁴⁾。

アリストファネスからテオフラストスに至る上掲のアッティカのすべてのテキストに現れる εἰρωνεία の振舞い方に基づいて、ひとはおそらく誤った結論に飛躍するであろう。εἰρωνεία はこの時代をとおして、ずる賢く故意に欺こうとする言動を表示するのにきわめてふつうに (commonly) 用いられているのだが、その故にプラトーンは、この言葉をソクラテースについて常にそのような仕方 で用いていなければならないのか? [用いていなければならない、というように——] 多くの著名なギリシア学者たちは、そのように想定した。そのなかにはバーネット ⁽¹⁵⁾、ヴィラモーウィッツ ⁽¹⁶⁾、ガスリー ⁽¹⁷⁾ がいる。この種の推論は非常に危険であると指摘させてもらおう。ある語が多くの場合に或一つの意味で使用されているという事実から、他の場合に別のそれと明確に異なる意味で使用されることはありえないということが帰結するわけではない。そのような統計的推論はつねに危険を伴う。そして上の統計的推論が誤りであることは確かなのである。次のテキストを考察せよ。

T2 G. 489D-E: [a] ソクラテース: 『よりよい』によって君は『より強い』を意味しているのではないのだから、君が意味しているのは何なのか、僕にもう一度言ってくれたまえ。そしてもっとやさしく教えてくれないか、ねえ君、立派なお人よ。僕が君の学校から逃げ去ろうとしないようにね。」 カリクレース: 「あなたは私を嘲笑っている (εἰρωνεύη) のだね。」

[b] ソクラテース: 「いや、ゼトスに誓って僕は嘲笑っていない。君が以前に僕をさんざん嘲笑う (πολλὰ εἰρωνεύου) のに用いたあのゼトスに誓ってね。」 ⁽¹⁸⁾

[a]では、ソクラテースが自らにカリクレースの生徒の役を割り振っていることに対して、カリクレースが抗議している。——これは、裏が透き通って見えるくらいのアイロニーで

ある。というのも、明らかにカリクレースは、校長の役割をずっと務めてきたのは、反対にソークラテースの方であると感じているから。[b]では、ソークラテースは、カリクレースの方こそ以前に嘲笑のために自分をゼトスの兄弟の哀れなアムフィオーンに結びつけた、と応酬している。アムフィオーンは「高貴な人間であるにもかかわらず、愚かな若者の外見をしている」(485E-486A) ののである。いずれの場合にも嘲笑に対する抗議が為されているが、しかしそこには故意に欺いているとの非難はみじんも含まれてはいないのである。いずれの場合も、ふりをしているとか、ずるいとか、言い抜けしているといったことは全く問題になっていない。——それは、彼らがあからさまな悪口という手段をとって、互いに「豚!」とか「頓馬!」と罵り合った場合にも、そういったことが問題にならないのと同じである。

私の目的にとって同じくらいに教えるところがあるのは、*Rhetorica ad Alexandrum* (『アレクサンドロスに贈る弁論術』、著者不詳、おそらく前四世紀の論考) からの以下のテキストである⁽¹⁹⁾。

T3 *eirōneiā* とは、[a] 或ることを実際には言っているのに、言っていないと称することであるか、それとも、[b] 物事をそれと反対の名前でもって呼ぶことである。(21)

[a] には何も新しいものは見当たらない。*eirōneiā* はこの必携書が弁論家に提供する商売上の多くのトリックの一つである⁽²⁰⁾。[b]はそうではない。そのことは彼の挙げる例においていっそう明瞭になる。

T4 明らかに、この善き人々 (οἱ μὲν οἱ χρηστοί) は味方に対して大きな害悪を及ぼしたが、これに対してわれわれ悪しき人間は、彼らに多くの恩恵をもたらした (*loc. cit.*)。

χρηστοί のここでの用法は、アリストファネース『雲』冒頭でストレブシアデースが独白する台詞を私たちに想起させる。「この善き若者 (ὁ χρηστός οὗτος νεανίας)」と老人は役立たずの息子について言っている⁽²¹⁾。これは最も純度の高いアイロニーである。すなわち、相手を欺こうとする意図が少しもない嘲笑である。

私たちはこの事態を理解することができるか？ 多数のアッティカのテキスト(——そのうちの八つに私は言及したが、同じ種類のテキストをさらに多く付け加えることもできただろう、)において、*εἰρωνεία* は故意に誤って伝えることを含意していた。しかし九番目のテキスト (T2) ではそれはそのような含みを全く欠いた嘲笑を表わしているし、十番目のテキスト (T3) の[b]でもそのことは同じである。T3 では前四世紀アッティカの用法に深く通じた弁論家が *εἰρωνεία* の定義を与えているが、この定義はクインティリアヌスをあまりに見事に先取りしているので、二つの定義は正確に等価のものになっているほどであ

る。つまり、両者ともに同じ言語行為を記述しているのであって、T3[b]では話者の観点から、クインティリアヌスにおいては聴者の観点から、それが見られているのである。この言語現象は理解可能であるか。然り、私たちが英語の“pretending”の同じような振舞い方を想い起すときには、完全に理解可能となる。仮病を使う人が病気だと“pretend”しているとか、ペテン師が自分にはいいコネがあるのだと“pretend”していると言うことは、彼らは人を欺く人間だと言うに等しい。つまり、「偽りの申し立てをする」(to allege falsely) ということが、to pretend の基本的な用法である。しかしコンテキストによっては、“to pretend”が偽りを迂回するがゆえに、偽りの申し立てを迂回するということが起きる。それは、子供たちは色のついたチップがお金であると“pretend”している（彼らはそれを“pretend-money” [おもちゃのお金] と呼ぶ）とか、人形が病気であるとか死ぬとか学校に行くと“pretend”している、と私たちが言うような場合である。それとちょうど同じように、先の例で詐欺師は自分の娘に宝石を差し出して、これはダイヤモンドだよと“pretend”しているということもできるだろう。この場合の“pretending”は、彼が引っかけようとしている人たちに宝石を呈示して、これはダイヤモンドですよ、と“pretend”することからこの上なく隔たっている。後者が“pretending”の最もふつう (common) の（そして論理学に関しては第一次的な）用法でなければならないということとは、この一次的用法に接している、その語の二次的用法を少しも妨害するものではない。それは意図して欺くということから全く離れた副次的用法であって、「自ら進んで不信を中断すること」に、すなわち、私たちがそれによって芸術や演劇における想像上の虚構世界に入っていくところの、あの自発的な「不信の中断」に基づいた用法である。メイ・ウェストの発言にあったようなアイロニカルな言葉づかいを解明するうえで援用できるのは、“pretending”のこの意味である。私たちは、彼女は旅の長い道のりが招待を断った理由であると“pretend”している、と言うことができるであろう。しかし、私たちが“pretending”を第一次の意味に使用して、そのように言うとするれば、それはまったく筋の通らぬばかげた言い方である。偽りの申し立ては存在しない、なぜなら申し立てが存在しないからである。彼女は私たちをからかっているのである。

以上のことから次の事実が適切に説明されると私は思う。つまりそれは、*eirōn*, *eirōneia*, *eirōneuomai* という言葉は、ふつう不誠実を暗に意味するために使用されるのであるが、それでもしかし、そのような含意を喚起することから完全に離れた、それに代る用法を持つことができるという事実であり、また、パーネットやヴィラモーヴィッツ、ガスリー⁽²²⁾やドーヴァー⁽²³⁾には失礼ながら、それらの言葉は時にそのような仕方でもプラトーンのソークラテースによって使用されるという事実である。私が思うに、生じたのは次のことである。すなわち、アッティカで *εἰρωνεία* の使用が普及したとき、（それは遅くとも前 433 年よりは前である、）その意味の場 (semantic field) は現代英語の“pretending”のそれと同じ広がりを持っていた、そして *eirōn* はたいへん好ましくない意味を含む言葉であった

——中傷ないし悪口の言葉として用いられた——、それというのも、先に見た二つの用法のうちで第一の用法が第二の用法にはるかに優越していたからである。*eirōn* と呼ばれることは、よく言って失礼なことであり、最悪の場合には侮辱的なことであっただろう。しかし、歴史のページを三百年ばかり繰って——前四世紀のギリシアから前一世紀のローマに行く——、私たちは長く親しんでいるので慣れているが、そうでなければ仰天させられるであろうような変化を見ることになる。この言葉は今やその不愉快なニュアンスを失ってしまっている。キケローは音訳したギリシア語によって彼の母語を豊かにすることを好んだ人であるが、彼がこのやり方で *ironia* という新しいラテン語を産み出したとき、その意味には全く異なった色合いが付いていた。それは洗濯され脱臭され、今や、都雅と優美と良き趣味の、その全てを高度に備えていることを表わす印になったのである。

T5 Cicero, *De Oratore* 2.67: 君が思っていることと違ったことを言うときには、偽って隠すこと (*dissimulatio*) は、また都雅でもある。……私が思うに、ソークラテースはこのイロニアと偽って隠すことにおいて魅力と人間味によって他のすべての人びとに優っていた。その様式は非常に優雅であり、真面目さで味付けされている⁽²⁴⁾。

そして二世代後にクインティリアヌスがこの語の用法を固めて、その意味を本論考冒頭に掲げた定義の中に包み込んだとき、*ironia* がその評判の悪い過去を完全に脱ぎ捨てて、現代のヨーロッパの言語と感性においてそうなるであろうところのものにすでになっているということを、私たちはもはや少しも疑わないのである。言っていることと反対の意味を表現するための言葉——欺瞞なき嘲笑のための完全な媒体。この用法は、ギリシア古典期の祖語においては副次的であったのに、今や標準的な用法に変わっている。*εἰρωνεία* はアイロニーに急変したのである。

このような事態を生ぜしめたのは何であったのか、それを正確に述べることはできない。この語の上方移動といった事態を追跡するには、私たちには言語的資料が大量に欠けているからである。私たちとして言うことができるのは、誰がこの事態を生ぜしめたのかということである、と私は思う。それはソークラテースである。といっても彼がこの語に攻撃を加えたというのではない。彼がそんなことをしたと信じてよい理由は何もない。彼が「*F* とは何であるか」という設問で「*F*」に *eirōneiā* を代入したり、またその他の仕方で *eirōneiā* を論駁のハンマーで叩いて攻撃したということとはどの文献にも出て来ない。彼がこの語に変化をもたらしたのは、何か *eirōneiā* についての理論を立てるということによってではなく、それが意味すべき或る新たなことがらを創り出すことによって、その語を変化させたのである。そしてこの或る新たなことがらというのは彼自身のうちに実現された生きることの新しいかたちであるが、それはまさに、彼の当時の用法のうちでは第二の用法における *εἰρωνεία* がソークラテースという一個の人間となって実現しているということなのであ

った。つまりその新たなかたちとは、子供がおもちゃのチップをお金だと見せかけるのと同じように故意に欺くということが少しも無く、真正のゲームと同じように偽り装うこととは無縁であるが、しかしゲームとは違い、その嘲笑することにおいて真面目 (*cum gravitate salsum*) な、ふざけることに至極真剣 (*severe ludens*) な、そのような εἰρωνεία が、まさに一個の人間として実現したものであった。それは以前には知られてもいず、想像もされなかったタイプの個性であった。彼の時代には非常に人目を引くものであり、その後は永久に記憶に残るものであったから、ソークラテースの死から数世紀後には、教養ある人士が *ironia* を考えるときにはほとんどいつの場合もソークラテースを思わずにはいられなくなるといった時代が来るだろうと思われるほどであった。そしてそのような時代が到来したとき、*eirōneia* という語の意味は変わったのである。範型的な *eirōn* としてのソークラテースのイメージは、その語がかつて含んでいた意味に変化をもたらした⁽²⁵⁾。*eirōn* ないし *eirōneia* が人となって実現したのがソークラテースであったという、人びとの思いの中の、彼のその残像が最終的な影響を彼らに及ぼしたことによって、古典期には周辺的で重要でなかった用法がその中心的な、その普通で基準的 (*normative*) な用法となった。*eirōneia* は *ironia* になったのである。

私は重要なことを主張した。私たちの資料集の中に、ソークラテースが本当に、キケローやクインティリアヌスが考えたような第一のアイロニスト (*arch-ironist*) であることを教えてくれるテキストは見つかるだろうか。

アリストファネスには何もない。『雲』のアンチ・ヒーローはそれぞれの人に違った人物として、多くの人びとのあいだで多くの顔を持つものとして現れるが、しかし誰に対してもアイロニストとして現れることはないのである。自然哲学者ないし賢者ないし秘儀を司る者としてはひどく謹厳であり、青年の教育者としては悪党すぎる⁽²⁶⁾。『蛙』(1491-9)において間接的に非難されるときにも、彼はアイロニストとしては描かれていない。彼の肖像画は今はかなり違っている。思案所の外では——そうでなかったら、並みのアテナイ人が彼の隣りに席を選ぶという問題は起きないであろう——、彼はもはや意地悪な人物ではない。しかし彼は依然として理屈をこねる人間であり、その重箱の隅をほじくるような厳肅さ (ἐπὶ σεμνοῖσιν λόγοισι καὶ σκαριφησιμοῖσι λήρων, 1496-7) は、彼と話す人びとを無味乾燥なつまらぬことごとくに吞み込んでしまう。この勿体ぶったのらくら者のお喋りには、ほんのわずかのアイロニーも見出せない。

クセノフォーンに目を転じてみよう。最初はここでも捜しているものは見出せないように思われる。『思い出』のほとんどの箇所をとおして、この疲れも知らずに説教を続け、真面目一方で退屈なソークラテースは、アリストファネスの戯画に描かれた無神論的自然哲学者にして「まこと微妙複雑なる戯言ほざく大祭司」⁽²⁷⁾同様に、その魂の中に冗談も嘲笑も謎かけも持っていないのである。しかし時々それはそれとは違ったものが閃くのを私たちは認める⁽²⁸⁾。そしてそれから、第三卷第十一章において私たちは大きな変化に出会う。こ

ここではソークラテースは、移り気な人間に変わり、美しいテオドテーの訪問に出かける⁽²⁹⁾。彼は彼女に顧客の数を増やすための提案を申し出て、彼女の方は彼に、男の友人たち (*philoi*) を捕える協力者になるように依頼する。彼はいやだと言って、公私にわたってたくさんの仕事があると申し立て、さらに次のように付け加える。

T6 Xen. *Mem.* 3.11.16:「僕には自分の女友だち (*philai*) がいるのだが、彼女たちは僕から惚れ薬と魔法を学ぼうとして、昼も夜も僕の許を去ろうとしないのだ。」

彼女は、この「女友だち」が哲学者である⁽³⁰⁾のを、がっかりさせられることに中年男であるのを覚らなければならず、また、事実、覚るのだから、ソークラテースには恋の妙薬を教授してやるような可愛い女の子がいっぱいいる、と考えるような過ちを犯すことなどありえないのである。だから私たちはここでとうとう、キケローやクインティリアヌスであれば *ironia* として認めるであろう、と思われる或るものを獲得するのである。もっともそれは珠玉の *ironia* とはとても認められない。そのユーモアは余りにいたずらっぽく、またわざとらしいからである。

『思い出』のソークラテースは、テオドテーを訪問した後に、再び、その陳腐健全なる道徳的説教を続ける。しかし彼は、これを最後に、クセノフォンの『饗宴』では、そのような習慣をきれいさっぱり改めている⁽³¹⁾。『思い出』はソークラテースのために厳しく弁明しようとしていて、そのためにそこでのソークラテース像の色合いは濃淡様々の灰色にトーンダウンしているが、かりにそんなことがなかったとすれば、『思い出』のなかの彼も、私たちが現に『饗宴』のなかに見ているようなソークラテースであったかもしれない。饗宴という舞台設定に促されて、クセノフォンはこの作品の絵の中に明るい、それどころかければ美しい色を塗っている。君が大きな誇りを抱いている君自身の技術は何かと問われると、それは取持ち業 (*μαστροπός*, 4.56) である、と彼は言う。美男子のクリトブ羅斯に、あなたと私のどちらが美しいか競い合いをしようと挑まれると (5.1ff.), 彼は、自分のこの上なく醜い顔立ち——獅子鼻と特大の朝顔形の鼻孔——のほうが、〈役に立つ〉は〈美しい〉と同じであるということを理由にして、いっそう美しいと主張している (5.6)。私たちはここでアイロニーの新しい形を見ているのであって、それというのも私の知る限りでは、ギリシア文学にその前例が見出せないからで、これはソークラテース特有の形式なのである。他によい名称がないので、私はそれを「複合的アイロニー」(complex irony) と呼んで⁽³²⁾、単純なアイロニー (simple irony) ——つまり、私が本章でこれまで論じてきたアイロニー——と対照することにしよう。「単純な」アイロニーにおいては、言われていることは意味されている (is meant) [、つまり話者が言おうと (意図) している、ないしは言いたい] こととはまったく違っている。その通常の (ordinary), ふつうに理解されている意味 (sense) に取られると、当該言明はただの偽りであるにすぎない。「複合的

な」アイロニーにおいては、言われていることが意味されていることであり、且つ、意味されていることではないのである。その表層内容 (surface content) は一つの意味においては真であるように、そして別の意味においては偽であるように意図されている。たとえば、ソクラテースが自分は「取持ち屋」であると言うとき、彼は自分が言っているそのとおりのことを言おうとしている (mean) のではないが、しかしそれでもやはり、その言葉どおりのことを言おうとしているのである。彼がその語のふつうの、通俗的 (vulgar) な意味において意味している [、あるいは言おうとしている] のでないことは明らかである。しかしそれにもかかわらず、彼はその語に特別に (*ad hoc*) 別の意味を与え、それに、「ある男 [X] のために取持ってやった女性 [Y] が、この男 [X] が彼 [ソクラテース] と交際することになる場合には、この男 [X] にとって魅力的となるようにする人」(4.57) を意味させているが、このもう一つの意味では、彼は言っていることをそのとおりに意味している [、あるいは言おうとしている] のである。クセノフォンのソクラテースはまさしく取持ち業を営んでいる、と主張することができる。自分の平たく押しこまれた鼻と突き出た眼と大きくて朝顔形の鼻孔は美しいのだ、と彼が言うとき、彼はその言っていることを意味しているのではないし、また意味しているのである。「美しい」という語の通常の意味では、彼は、それらが美しいということを躊躇なく否定するであろう。しかし、もしも「美しい」によって、「それらに求められる機能のために巧く作られている」(5.4) を意味することが許されるならば、その場合には彼は、自分の特別な種類の眼や鼻は最高に美しいということを私たちに教えているであろう。ファッションモデルの深くくぼんだ眼とは違い、彼の眼はただ真っ直ぐ前を見るだけでなく、脇を見ることもできるし、彼の鼻は当今横顔をほめそやされる人の鼻よりもずっと効率的な通気孔であるというわけである。

それだから、クセノフォンの描くソクラテース⁽³³⁾には微かではあるが、ほんもののアイロニーがあるということは疑えない。しかし、*eirōneiā* が *ironia* に変化するに際して決定的役割を果たしたのは、真実、ソクラテースであったということを私たちに納得させるには、クセノフォンがソクラテースについて語るところは、いくつかの重要な点において未だ欠陥を有しているであろう。

第一に、クセノフォンがソクラテースの肖像画に描き入れたアイロニーには、全くと言ってよいほどに学說的意義が認められない。それらのアイロニーはソクラテースの哲学を解明するのになんら貢献するところがないのであって、それというのも、彼は、ソクラテースが自分の哲学を特徴づけるもののうちで、まさに「複合的アイロニー」として、——すなわち、クセノフォンが彼の主人公に“自分は取持ち屋であり魅力的な鼻を持っている”と言わせることで例示して見せた類いの「複合的なアイロニー」として、——理解してほしいと思っている、そうした特徴を、一貫して無視するからである。私が言っているのは、プラトンの初期対話篇のうちに聞きとれる重要な哲学的パラドックス、た

たとえばソークラテースが自分には知識はなく他人を教えたこともないと言っているような、そのような哲学的パラドックス⁽³⁴⁾のことである。これら二つのパラドックスはいずれも、複合的なアイロニーとしての外には理解することができない。自分には何の知識もないと公言するとき、その言っているとおりのことを彼は意味しているし、また意味しているのではない。彼はこの言葉によって聞き手に、道德の領域においては自分が確実に知っている主張できるような命題は一つもないことを、納得してほしいと思っているのである。しかし「知識」(knowledge)の別の意味では、すなわち「知識」という語が正当化された真なる信念(justified true belief)、——論駁的(elenctic)議論というソークラテース独特の方法によって正当化できる真なる信念——を指示するときには、彼が知っている主張できるたくさんの命題が存在する⁽³⁵⁾。そこでまた、私は、知識の否認と並行する教授の否認も複合的なアイロニーとして理解されるべきだ、と主張するであろう。慣習的

(conventional)意味では、「教授する」(teach)とは教師の精神から学習者の精神に知識を移譲することを言うにすぎないのであるが、この意味では、ソークラテースは、その言葉どおりのことを意味している。つまり、そうした類いの教授を彼は行わないのである。しかし「教授」に彼が与えるであろう意味においては、——すなわち、自称学習者を論駁的議論に関わらせ、彼らに自分の無知を気づかせ、自分の力で、教師が秘密にしている真理を発見できるようにすることという、——その意味においては、ソークラテースは、自分は教師である、ただ一人の真の教師であると言いたかったであろう。仲間たちとの対話は道德的自己改善に向かつての彼ら自身の努力を呼び起こし、手助けするという効果を上げるべく意図され、また事実そのような効果を上げたのである⁽³⁶⁾。

第二に、クセノフォンのソクラテース的著作においては、*eirōneiā*, *eirōn*, *eirōneuomai*という言葉がソークラテースに対して、クセノフォンその人によっても、また他のいかなる人によっても一度も適用されたことはないのである。仮に今日、クセノフォンの描くソークラテースしか伝存していなかったとすれば、ソークラテースの同時代人は*eirōneiā*を優れてソークラテース的な特性と見ていた、と私たちが考える根拠は何もないことになるだろう。前出 T1 でのトラシマコスソークラテース攻撃においては、名詞 *εἰρωνεία* とその同族動詞 *εἰρωνεύσοιτο* は非常に目立っていたのだが、しかし、『思い出』のヒッピアースもこれと全く同じ非難を口にしていて、このときには、それら二つの語は脱け落ちてしまっているのである。ヒッピアースが申し立てる次の苦情は、ソークラテースの *eirōneiā* に対する苦情として読まれなければならない。

T7 Xen. *Mem.* 4.4.9 : ⁽³⁷⁾「君は誰に対しても質問し反駁し、それでいて自分では誰に対しても説明しようとせずに、あるいは何についても君自身の意見を述べようとせずに、他人を嘲っているが、われわれはそうした君にはもううんざりしているのだ。」

T1におけるソークラテースの「いつもの *eirōneia*」への言及は、ここでは洗い落とされている⁽³⁸⁾。

幸運なことに私たちにはプラトンのソークラテース的対話篇が残されている。そこにはクセノフォンの与えなかったものが非常に豊富に提供されていて、それを全部仔細に調べ上げようとする、一冊の書物を著わさなければならないほどである。取捨選択する必要があるが⁽³⁹⁾、私は一箇所だけに集中することにしよう。——それはプラトンの『饗宴』におけるアルキビアデースの演説を構成する6頁ほどの箇所である。この文章はプラトンの中期対話篇に属しているにもかかわらず、そこでのソークラテースは、間違いなく初期対話篇の哲学者である⁽⁴⁰⁾。彼は初期対話篇のソークラテースに、——これは、私が第2章で論じるように、歴史的ソークラテースをプラトーンが再創造したものなのであるが、——非常に顕著な特徴となっている、知識の徹底的な否認を表明する人間として描かれている⁽⁴¹⁾。ソークラテースは『饗宴』における自身の演説で、ディオティーマの講話を、彼の公言するところでは報告しているが、それは超越的形相⁽⁴²⁾というプラトンの非ソークラテース的教説を、彼の他のどの作品にも劣らず強力に肯定している。しかしアルキビアデースは、ソークラテースがディオティーマから学んだと言っている、その教説を聞いてはいない。彼はソークラテースが演説を終えた後に酒宴に加わったのである。アルキビアデースがこれから行おうとしているソークラテースに関する演説、つまり『饗宴』の掉尾を飾る演説のなかで、プラトンは、非プラトニックなソークラテースを、——『国家』第一巻でも復活させているのだが、それと同じくらい——確実に復活させている⁽⁴³⁾。彼は私たちを、ソークラテースという玄関から『国家』に案内し、また、私たちに付き添いながらソークラテースという後玄関から『饗宴』の外に連れ出すのである⁽⁴⁴⁾。

アルキビアデースの演説のなかで鍵になる文は次のものである。

T8 *Smp.* 216E4: 「彼は *eirōneuēsthai* しながら (*eirōneuomenos*)、そして人びととふざけ合いながら、全生涯を過している。」

私たちは *eirōneuomenos* をどのように読めばよいであろうか。クインティリアヌス (*Inst. Or.* 9.2.46) が *ironia* はたんに一つのテキストや一つの演説ではなく、「一つの生涯全体」(*vita universa*) を特徴づけることがあると述べたとき、そのただ一つの事例はソークラテース〔の生涯〕であった。そこで私たちには、彼ならば、どのように当該テキストの *eirōneuomenos* を読んだであろうかということが分る。しかしそれは何度も、学者たちによって様々に読まれているのだ。ガスリー⁽⁴⁵⁾は、その言葉は「ソークラテースが自分のほんとうの性格について、皆を欺くやり方」に関連すると取る。ドーヴァー⁽⁴⁶⁾は、その言葉を上の T1 の *εἰρωνεία* また *εἰρωνεύσοιτο* と同じように読み、それがここで “irony” を意味することを否定し、ソークラテースの「装われた無知」に関連すると取る。スージー・

グロードゥンは次のように訳している。

He *pretends* [my emphasis] to be ignorant and spends his whole life putting people on.

そして W・ハミルトンの訳。

He spends his whole life *pretending* [my emphasis] and playing with people.

クインティリアーヌスに従うと、アルキピアデースは、ソークラテースは生涯にわたるアイロニスト (a lifelong ironist) であると言っている、と理解できるだろう。ガスリーとその仲間たちに従うと、アルキピアデースは、ソークラテースは生涯にわたる欺瞞者 (a lifelong deceiver) であると言っている、と理解できるだろう。上に説明したとおり、当時は後者がもっともふつうの用法であったのだから、これらの学者たちのほうが正しいと推測されても致し方ないのかもしれない。そこで誰であれ、逆に、クインティリアーヌスの読み方が正しいと信じるのであれば、その人は、挙証責任を果たす必要がある。私は喜んでその責任を果たすつもりである。

しかし私は、アルキピアデースの演説のなかの、私の主張にとって等しく重要なもう一つの文から始めなければならない。というのも、この文でも決定的に重要な語は、一々の言葉のやりとりの中でソークラテースが語ったことに対してではなく、彼のいつもの特徴ある語り方に対して適用されているからである。

T9 *Smp.* 218D6-7: 「彼は僕の話をおしまいまで聞いていた。それから、非常に *eirōnikōs* に、極度に特徴のある、そしていつもの⁽⁴⁷⁾言葉づかいで言った。…」

ここでグロードゥンと ハミルトンは、それぞれ次のように訳している。

“He answered in that extremely *ironical* way he always uses [my emphasis], very characteristically.”

“He made a thoroughly characteristic reply in his usual *ironical* style [my emphasis].”

かくて彼らは二人とも自分たちの方から進んで、私の欲しいものの全てを私に与えてくれる。自分たちが何をしているのか、彼らは気づいているのか。前の “*eirōneuomenos*” (T8) の翻訳——これは “pretend-s / -ing” と訳されていた、——をすっぽかしていることが彼らには分かっているのか。私は知らないし、また知る必要もない。この T9 ではプラトー

ンのテキストが“ironical”以外の訳語を許していない，ということだけを言うておく。

コンテキストを想起してみよう。T9はアルキピアデース演説の主要部の，そのまた頂点に位置している。その頂点というのは，今ははるかな昔となった，若き日のエピソードを物語るところである。彼はその頃，いまだ「若さの盛り」(bloom)に，つまり，少年から大人の男に移行する最終の段階にあったのだが，この段階は彼らの文化においてはアルキピアデースの肉体が年長の男たちにとって最高度に魅力的となる時期であった。物語は次のように始まる。

T 10 *Smp.* 217A : 「彼はすっかり僕の若さの盛りに参っていると信じたものだから，僕はそれをもっけの幸い，すばらしい幸運と思ったのだ。だって，彼に僕の好意を与えることによって，僕は彼から彼の知っていることのすべてを学ぶことができるだろうからね。」

セックスと道徳的知恵を交換しようとする企ては，今日では信じられないことに思われるかもしれない。しかしその当時は，アルキピアデースと同じ状況に置かれた者にとっては少しもそのようには思われなかったであろう。

(1)『饗宴』のパウサニアース演説(218D6-219A)から分るように，セックスと道徳的知恵を交換するということは，小年愛(pederastic love)の高貴な形態においては慣習(nomos)となっていた。つまり，少年は「好意」を与え，成年男子は知的で道徳的な向上を与える。

(2)アルキピアデースは，生涯を通してあの無節操な成功の大部分を自分にもたらしにくるようになった，己れの強みをすでに備えていた(，そして彼はそのことを自覚していた)⁽⁴⁸⁾。その強みというのは，すばらしい美貌と優雅さ⁽⁴⁹⁾である。

(3)プラトーンの他の対話篇によって⁽⁵⁰⁾，またクセノフォーンによっても分るのだが⁽⁵¹⁾，ソークラテースは男性の美に非常に敏感であった。だから，セクシーな少年であれば，彼のこの敏感さに共鳴しないということはほとんどあり得なかったであろう⁽⁵²⁾。

(4)ソークラテースは質問に答えない，また，自分の「知恵」を説明することもない。「知恵」の断片が論駁的な議論のなかにこぼれ出て，そのため，問答の相手は，ソークラテースは一体どれほど沢山の知恵を隠し持っているのだろうか，という思いのなかに置かれる。

(5)私たちは，話し手が非常に意志の弱い人であることを知っている。彼は演説全体を次のような告白から始めている。

T11 *Smp.* 216B3-5 : 「僕は彼に反論できないということ，そして彼に命じられるままに行わなければならないということが，僕には分かっているのだ。しかし，彼から離れてしま

うと、僕は大衆の称讃にうち負かされてしまう。」

アルキビアデースは他のティーンエージャーとは違っていた、と考えなければならない理由は少しもない。

上記5つの点を考え合わせると、「立派で高貴な人間」(*kalos kagathos*)になることを切望している少年が、その手がかりはソクラテースの知恵の膨大な秘密の蓄えのなかに隠されていると思い、そこで、もしも僕が、僕の知るすべての男たちを魅了する、僕自身の最上の「若さの盛り」を見返りとして差し出すとしたら、ソクラテースの方でも僕にその手がかりをそっと与えてやろうという気持ちになるかもしれない、と思いこんだとしても不思議はないだろう。彼はこの計画を念入りに遂行した。少年を誘惑するためのその当時使われた手管の全レパートリーのなかからその一つ一つを実行してみた⁽⁵³⁾。しかし効き目は全然なかった。ソクラテースは相変わらずやさしかったが、そこには距離があった。アルキビアデースは恋の甘くたわい無い言葉を聞きたいと思ったのに、返ってくるのは何時にも変わらぬ論駁的な議論であった。とうとう彼はソクラテースを起こして自分の計画を漏らしてしまう。彼が得た返答は次のようなものであった。

T12 *Smp.* 218D6-219A1: 「彼は僕の話をおしまいまで聞いていた。それから非常に *eirōnikōs* に、極めて特徴のある、いつもの言葉づかいで次のように言った⁽⁵⁴⁾。『ねえアルキビアデース、もしも僕について君の言うことが真実であり、君をもっとよい人間にすることのできる何がしかの力が本当に僕のうちにありとすれば、君も愚か (*phaulos*) ではないと見える。つまり君は僕のなかに、想像もできないほどに美しく、君の美貌にも圧倒的に優っている何かを見ているに違いないのだ。君のしているのがこのようなものであり、美と美を交換したいというのであれば、君は僕を大いに利用し騙そうという魂胆なのだ。君は本物の美を見かけの美と、「黄金を真鍮と」交換しようと試みているわけだからね。』」

ここでは *eirōnikōs* の意味が “ironically” でなければならないということは、議論の余地なく明白である、と私は思う。というのもコンテキストは、見せかけ (*pretence*) ないし欺瞞を考えるための足場にならないからである。ソクラテースは、それはいかさまだと言って、提案された取引をきっぱり断っている。彼はまず単純なアイロニーから始めている。つまり、彼はアルキビアデースに「君は愚かではない」と言っているのだが、その意味は明らかに、「君は愚かである、非常に愚かである。私が騙されて黄金と真鍮を交換するなど考えること以上に、愚かなことが一体あるだろうか」ということなのである。ソクラテースがここで真似ている『イーリアス』の一節でそうしたことが起きたとき、——グラウコスが自分の黄金の甲冑を真鍮の甲冑と交換したとき——、詩人は次のように説明している。「ゼウスは彼の知力を奪った」⁽⁵⁵⁾。ソクラテースは次のようにアルキビア

デースに言っているのである。「私が君の提案を受け入れるとすれば、さだめし私は気が狂っていることであろう。君は私のことを何という愚か者だ、申し分ない馬鹿者だと考えているに違いない。私が君のその提案を受け入れるがままになるだろうと、君が考えているとすれば。」

彼は「複合的な」⁽⁵⁶⁾アイロニーで結んでいる。

T13 *Smp.219A1-3* : 「でもねえ、君、もっとよく見てごらん。僕が何ものでもないということを知っているわけではないようではいけないからね。精神の眼は肉体の眼が盛りを過ぎて初めて鋭くなるものだが、君はまだそこには全然至っていないのだからね。」

アルキピアデースは、自分の探している「黄金」が結局そこにはないということを教えられる。もしも道徳的な知恵が——アルキピアデースが理解したように——、何かと交換に手渡しできる、そういった類いのものとして理解されねばならないとすれば、ソクラテースは、自分にはそのような道徳的な知恵は全くない、そのような知恵の保管所としては自分は「何ものでもない」と主張するだろう。しかし、だからといって、ソクラテースが別種類の知恵を持っているということを否定しているわけではない。この別種類の知恵というのは、もしもアルキピアデースがソクラテースを指導者 (*guru*) ではなく探究のパートナーと見て、自分でそれを探すのであれば、ただで得ることのできるような、そのような知恵のことである⁽⁵⁷⁾。私たちがこの言葉のどこかに欺瞞を見出そうとするのであれば、私たち自身がその欺瞞をそこに植え付けるのでなければならないだろう。ソクラテースが非常に *eirōnikōs* にアルキピアデースに語った言葉には、彼をミスリードしようとする意思はいささかもないのである。

それでは、これまでの考察から *eirōneuomenos* (T8) の意味は確定できるだろうか？ 否。しかしその考察から、この言葉の意味もまた *eirōnikōs* (T9, T12) と同じであるだろうと推測することができる。というのも、仮にステファノス版頁付けでちょうど2ページ前の「彼は全生涯を *eirōneuesthai* しながら (*eirōneuomenos*) 過している」(T8) という言葉が、ソクラテースは「自分のほんとうの性格について皆を欺きながら」生涯を送っているという考えを伴っていたとすれば⁽⁵⁸⁾、その場合には、*eirōnikōs* が T9 において上述の仕方で使用されるということはあるそうにないからである。そこでコンテクストを、すなわち誘惑物語の直前の段落を精しく見てみよう。これらの段落はアルキピアデースの演説冒頭にあった有名な比喻を追求している。

T14 *Smp. 215A7-B3* : 「彼は彫像屋の作業場に置かれたシレーノス像に非常によく似ている、と僕は言いたい。…それらのシレーノス像を開いて二つにすると⁽⁵⁹⁾、その内部には神々の似像のあることが明らかになるのだ。」

この文章は仮面の陰に隠れて生きた人間の、——神秘的な、謎のような人物であって、誰一人として知る者のない人間の——、真実を鮮やかに描いている。「君たちの誰も彼を知ってはいないのだということを、君たちは知るべきなのだ」(216C・D)、とアルキビアデースはソークラテースの友人たちに語る。しかし、このように言ったからといって、それは、ソークラテースがこれまで友人たちを欺いてきたと言おうとしているのでは全くない。感情や考えを表に現わさないということと、欺瞞的であるということとは同じではない。この比喻から得られるものは、隠蔽ではあっても⁽⁶⁰⁾、欺瞞ではない、ということだけである。しかしたとえそうだとすると、アルキビアデースはこの喩えについての彼自身の説明のなかで欺瞞を仄めかしてはいないだろうか、と私たちは問うてみなければならない。

T15 Smp. 216D2-5 : 「君たちがご存じのとおり、[a] ソークラテースは美しい若者に恋をしていて (erotically disposed)、絶えず彼らにつきまとい、彼らにすっかり参っているのである。そしてまた [b] 彼は何も知らないし、万事について無知であるということ、これまた諸君の知るところだ。…これはシレーノスに似てはいないだろうか？ 然り、ものすごく似ているのである。」

ソークラテースの **eroticism** [少年の若さの盛りに異常に恋心をそそられること] への言及 ([a]) は、プラトーンやクセノフーンの他の箇所においても十分に裏づけられる⁽⁶¹⁾。しかしここでは、ソークラテースが美しい若者の若さの盛りを追い回すことを描写の中心に据えた後で、アルキビアデースはそれを全面的に撤回しているように見える。

T16 Smp. 216D7-E1 : 「誰かが美しかったところで、そんなことを彼はまったく意に介していないのだ、ということを、君たちは知るべきなのだ。彼がどれほどその種のことを嘲っているかということは、君たちには信じられないだろうね。」

彼は誘惑の企てが頂点に達したところで同じことを四回も述べている。

T17 Smp. 219C3-5 : 「彼はあんなにも見下し、僕の若さの盛りを軽蔑し嘲笑し、またあんなにも馬鹿にしていた。」

だからソークラテースは、一方では男性の美に「すっかり参っている」が、他方ではまたそれをまったく軽蔑もしている、と言われる。ガスリーであれば、このことを恰好の根拠にして、**T8** の *eirōneuomenos* に欺瞞を読み込んだのではないだろうか？ もしもソークラテースが男性の美をあれほどまでに軽蔑しているのであれば、それを追いかけるのはい

んちき以外の何であるだろうか。

これは非常に適切な疑問である。私は真っ向からこの問題にぶつからなければならない。そのために私はソークラテースの *erōs*[恋]について少しばかり述べて、プラトーンの *erōs* から区別しておかねばならない、それというのも、ソークラテースの *erōs* とプラトーンの *erōs* の融合ということが非常にしばしば起きるからであって、——いちばん最近ではドヴァーの *Greek Homosexuality* (1978) とフーコーの *Histoire de la Sexualité*, vol.2 (1985) において、そのような融合が生じている。二つの *erōs* は次の四つの点において違っている。

1. プラトーンの *erōs* においては、恋する者が美しい少年のうちに恋しているものは、この美しい少年がその似像⁽⁶²⁾ であるところの超越的な美の形相である。ソークラテースの存在論には超越的な形相は含まれない。だから、彼が美しい少年のうちに恋するものは美しい少年それだけである。

2. プラトーンの *erōs* においては、情熱的な身体の接触⁽⁶³⁾ は普通のことである。『ファイドロス』の恋人たちは触れ合い、口づけし、「一緒に寝て」「一緒に眠る」(255E)⁽⁶⁴⁾。ソークラテースにおいてこれに相応するエロースの親密さ (erotic intimacy) は心の、ないし眼による接触に限られている⁽⁶⁵⁾。

3. プラトーンもソークラテースも最終の満足を禁止したが、禁止の理由は両者において異なっている。プラトーンの場合、その理由ははなはだしく形而上学的である。というのは、彼は魂が肉体に結合されていることを一つの運命と見て、この運命は生涯を通じての訓練を、——それは現世において魂を肉体からできるだけ分離し、そうすることで死後において輪廻の苦しみから解放されることをねらっているのだが——、そうした訓練を必要としていると見るのである。しかるに性の悦びは、この努力を挫折させ、魂を肉体に「釘付けにし」、真にあるところのものへの魂の感覚をゆがめるというのである⁽⁶⁶⁾。このような教説はソークラテースにはまったく異質無縁のものである。どの文献にも、ソークラテースがオルガスムの快楽そのものに異議を唱えたということは書かれていない。彼はただ、少年愛的結びつきにおいて追求されるようなオルガスムの快楽に対してだけ反対したのであり⁽⁶⁷⁾、しかもそれは道徳的な理由によるのであって、形而上学的な理由からではなかった。彼はそれを略奪の一形態、つまり、若い男性のほうが恋する者によって食べ物にされ(「食い尽くされ」⁽⁶⁸⁾)、恋する者の一方的な満足⁽⁶⁹⁾ のために利用されるという、そのような掠奪の一形態と見て、少年にとって悪いものと考えたのである⁽⁷⁰⁾。

4. プラトーンの *erōs* は奔流のような勢いをもつ感情を発生させる。それは、詩人たちが、

あらゆる形態の性的激情に、——それが少年愛と少女 (lesbian) 愛と異性 (heterosexual) 愛のいずれの恋に起因する激情であろうと——、帰するところの、そうした勢いに匹敵するものである。詩人たちと同じように、プラトーンは *erōs* を「狂気」と呼び、次のように記述している。

T18 *Phdr.* 251D-252B : 「そしてそのようにして悦びと苦痛のあいだで、恋する者は自分が次のような奇妙な状態にあることに取り乱すのである。混乱し熱狂し、彼を襲う狂気のために夜は眠ることもできず、昼は静かに座っていることもできない。母親も兄弟も友人も皆忘れてしまい、自分の財産を顧みないために破産したところで意に介することもない。以前には誇りに思っていた規則や上品さも今はこれを軽蔑し、奴隷の境遇を喜んで受け入れ、ただ彼として精いっぱい恋人の近くにいることができれば、とにかくどこででも眠るのである。」

そのような親しみと近しさを感じさせる、恋する者のしでかす愚行を、ソークラテースの *erōs* は受け入れることができない。この *erōs* は平衡を保ち、快活でこっけい、滲刺として頑固なまでに健全である⁽⁷¹⁾。ソークラテースが性的拒食症であるというのではない、(それと反対であることを私は上で強調した,) 或いは、彼が性の悦びを幸福の経済から削除するという、キュニコス派やキリスト教の決定を先取りしているというのでもない。ソークラテースは自身に認めたわずかな悦びでさえ、それをおおびらに追求し、少しも気後れするところがなかったし、どんな場合でもその悦びが自分の手に負えなくなるのではないだろうかと懼れることもなかった。というのも、彼の魂の力学においては、それは比べようもないほどに強い駆動力の場の中に保持されていたからである。アルキビアデースが、かつて垣間見た、サテュロスのごとき下卑た外見に隠された、「神の似像」を語る段になると、彼の言葉は恍惚とした響きを帯びてくる。言葉は、煌めく、感情を喚起する、形容句の揺らぎのなかに溶融する。

T19 *Smp.* 216E-217A : 「僕はかつてそれらの似像を見たことがある、そしてそれは非常に神々しく、黄金で出来ていて、申し分なく美しく、素晴らしいもののように思われたのだ。」

ソークラテースがおのれの魂の内に秘めている、この目もくらむばかりに眩しく魅惑的なものは何であるのか。それはソークラテースの *sōphrosynē* [節制] だと、アルキビアデースは言う。

T20 *Smp.* 216D7-8 : 「だが、飲み仲間諸君、彼を二つに開いてみると、その内部がどれほどの *sōphrosynē* に満ちているか [が分かるだろう]。」

しかしそれが *sōphrosynē* だけであるということはほとんどありえないであろう。というのもこれは誰の眼にも見えているものであるから。ソークラテース以外の誰にも見るのでできないものは、*sōphrosynē* のうちに彼が見出した幸福である、と私は言いたい。これこそは彼にとって、肉体の美やその他のいかなる現世的な善きもの——健康、富、名誉、生命それ自体——から得られるであろうと彼に思われたものよりも、はるかに魅惑的なものであった。だから彼は、これらの善きもののいずれについても、それをそれだけの価値のものとして愉しみ、それぞれのうちに満足ないし喜びの僅かではあるが美味しい分け前——それだけであって、それ以上ではない、——を賞味し、もしもそれがその分け前以上のものを約束した場合には、それに対して鼻に親指を立てた（それを「軽蔑した」）。最大の熱情は一切の小さな熱情を楽々と支配することができる。近頃ではフーコーにならって、恋 (love) に関する西洋の全ての論説において、「性は人を不安にさせる難題である」と言われている⁽⁷²⁾。もしもこのとおりであるとすれば、ソークラテースは例外である。私たちがプラトーンからソークラテースの *erōs* について学んだところによれば⁽⁷³⁾、この *erōs* には不安 (*inquiétude*) は全く存在しないのである⁽⁷⁴⁾。

以上のことを考慮すると、ソークラテースが若者の「若さの盛り」に戯れるということに欺瞞や見せかけを読み込むのは、恣意的な読み方だということが判る。ソークラテースの *erōs* は、アルキピアデースが T15 の [b] で彼に認めたのと同じ種類の複合的なアイロニーとして理解することができる、——すなわち「何も知らないし、万事について無知である」という言葉がそうであるような複合的なアイロニー。「自分は何も知らない」と主張するときに、ソークラテースはその言葉どおりのことを意味しているし、また意味しているのではないのだが、ちょうどそれと同じように、彼が若くて美しい男性への恋に魅せられている (*erotically attracted*) と言うときも、彼は言っているとおりのことを意味しているし、また意味しているのではないのである。少年愛の世間一般に (*currently*) 理解されている意味においては、彼はアルキピアデース⁽⁷⁵⁾を、また彼が追い求めている他のどんな若者をも恋してはいない。しかし、恋すること (*erān*) がソークラテースの *erōs* の学説と実践において持っている別の意味においては、ソークラテースは彼らを恋しているのである。彼らの肉体の美は、彼と彼らの精神との愛情深い出会いに添えられる特別の薬味である。だから「自分はアルキピアデースを恋する者である」(*G. 481D*) と他人に向かって言うときに、そして同じことを、アルキピアデース本人に言うときにも、——彼は疑いもなくそう言ったのである、——そこには何らの見せかけも欺瞞も存しないのである。

「しかし、あのように軽薄な若者たちに言い寄れば、彼らは日頃、アテーナイの有力者たちのおべっかを聞いて、そのせいで頭がくらくらしているから、必ずや欺かれるだろう。だから結局は、ソークラテースは故意に欺くという罪を犯しているのではないか？」このようにひとは言うであろう。他の場合はどうであったのか、それについては私たちは積極

的な情報を何一つ持ち合わせていない。しかしアルキビアデースの件については、自信をもって返答するに十分な資料があるのである。そのとおり、アルキビアデースは欺かれた。というのも、そうでなければ、彼が若さの盛りと知恵を交換するなどという、あのような気違いじみた計画を企むことはなかったであろうし、そのことに長い間こだわるといふこともなかったであろうから。彼はそのことに執着したけれども、ソークラテースは誘いのことを拒み続けた。彼は欺かれた、しかし誰に？ ソークラテースではなく、自分自身に欺かれたのである。彼が自分の行動を信じたのは、それを信じたかったからである。私たちもそんなことだろうと思ったかもしれない。だが推測は無用、まさに彼自身の物語るところから、自分自身に欺かれるということが起きたと判るのである。T12でソークラテースは申し出に対して「否」と言っている。禅の老師は愚かな質問に対すると、棒を質問者の頭に力いっぱい打ち下すことで答えるであろう。ソークラテースの拒絶も、老師の「否」と同じくらいに断固としたものであった。アルキビアデースは自分の計画が拒否されていることを覚らざるを得なかった。だがそれでも彼は、拒否されているとは思いたくなかった。彼はまるで「うん」とか、或いはそうでないまでも、せめてものことに、「さあどうだろう」とでも答えられたかのように、ソークラテースの寝椅子に入りこんだ。そして、これがあのとき起きたことであったとすると、ソークラテースはアルキビアデースを欺いた、彼は、この若者に自分が求めているのは肌を触れ合う恋（skin-love）であると思ひませようとして、それを言葉や行動に表わしたのだと、私たちが信じてよい理由は少しもないのである。

しかし私は問われるかもしれない。「たとえそうだととしても、上の説明から次のように推定できないであろうか。つまり、ソークラテースはあの晩よりもずっと前に少年の頭の中で起きていることを知っていて、しかし知っているのに、この若い友が自己欺瞞に耽るのを、それを追い払うために断固とした行動に出るといふことも全くなく、自分から進んで放置したのだと。」この疑問に対しては、確かにそのとおりである、と答えなければならない。あの夜以前に何度もソークラテースには、アルキビアデースに対して、君は馬鹿なまねをして物笑いになっている、自分の願望的思考に騙されている、と説明する機会はたっぷりであったであろう。だがソークラテースは何も言わなかった。毎日、彼は見守り、沈黙し続けた。何故そうしたのであろうか。筋の通った答えをしようとするれば、次のように答えるほかない。つまり彼は、アルキビアデースには真実を自分の力で突きとめて欲しかったのである。アルキビアデースへの彼の恋にはアイロニーが含まれていて、それは最初から謎を投げかけていた。そして苦痛に満ちたあの長い屈辱の夜に、少年がソークラテースの——そして彼は氷の塊であった！——隣で裸のまま、苦労して答えを見出すまで、そのアイロニーは続いたのである。

この第1章は、“irony”と“*eirōneia*”という二つの語の意味についての探究であった。そしてそのかなりの部分は、アルキビアデースの演説に現れる *eirōneia* のたった二つのト

ークンの意味に当てられた。その一つのトークンは *eirōneuomenos* (T8) であり、他は *eirōnikōs* (T9) である。しかしこの探究の及ぼす影響はさらに遠くにまで達している。そこでそうした影響について一言述べて、結論に代えることにしよう。

プラトーンのソクラテス的対話篇を私たちが勉強するときに、つねに心に重くのしかかってくる問題がある。それは、この対話劇の主人公は討論の戦術として相手を欺くことも辞さなかったのかという問題である⁽⁷⁶⁾。もっとも熱心なソクラテース研究者のなかには、彼が討論の相手を欺くのを当然のことと考える者もいる。キルケゴールにとってソクラテースは、ソフィスト術から繰り出すアイロニーによってソフィストを騙し、真理を認めさせるアンチ・ソフィストであった⁽⁷⁷⁾。パウル・フリートレンダーにとって、——この人の三巻本のプラトーン研究書は同時代に刊行されたどの学術書にも劣らぬ学識に溢れたものであったが——、そのフリートレンダーにとってソクラテースは「真理を認識する者は認識しない者よりもいっそう巧みに欺くことができるという事実と、故意に欺く者は故意にではなく、心ならずも欺く者よりもいっそう優れているという事実とを証す生き証人」なのである (1964 : 145)。こうした見方の影響は広い範囲に及んでいる。それはプラトーンに関するマイケル・オブライエンの見事な著作⁽⁷⁸⁾の核心部分にも、また、多くのすぐれた研究⁽⁷⁹⁾の端々にも見て取ることができる。しかし、そうした見方に対する明白な異論は、プラトーンがソクラテースをして次のように語らしめるところに含まれているのである。

T 21 G. 458A・B : 「僕はと言えば、僕は、あなたが僕と同じ種類の人間であるという前提を立てた上で、あなたに対して喜んで反対尋問を行うだろう。そうでないならば、僕はあなたを立ち去らせるだろう。では、その人間というのは、どんな種類の人間なのだろうか。僕は、もしも真実でないことを言ったときには反駁されることを喜び、もしも他人が真実でないことを言ったときには彼を反駁することを喜ぶような、しかし、反駁するよりは反駁されることの方を、——自分から最大の災厄を取り除くことの方が他人から最大の災厄を取り除いてやることよりもいっそう善いわけで、だからその分だけ、より多く、——喜ぶような、そんな人間の一人なのだ。というのも、僕たちが今議論している事柄について誤った信念をもつことほど、人間にとって災厄なことが何か他にあるなどということは、僕には信じられないのだ。」

この言葉は上に挙げた学者たちにはおなじみのものである。私たちは彼らに、あなたがたはこの言葉の誠実さを疑っているのかと、そして、疑ってはいないということを請け合うかどうかを、尋ねてみよう。さてその次には、以下のように尋ねてみよう。もしもソクラテースという人は、真理が相手側にあるときには、議論に勝つよりもむしろ負けるほうを望むのだとすれば、偽りの前提やソフィスト的推論を忍ばせることで彼にはどんな得があるのだろうか、と。この議論は決定的なものであるはずなのだが、しかし、次のような

言葉を私たちに返してくる学者たちの前ではまったくの失敗に終わる。彼らは言うのである、——あなたがたは、まさにそのような議論をすることで、今までアイロニーを解することなくプラトーンの手紙を読んできたということを暴露しているのだ、と。彼らは言う、——哲学的言説の通常の様式においてなら有りえないであろうことも、アイロニカルな様式においては普通のことになりうるということ、これは分りきったことだろう。もしもソクラテースがソフィストたちにしつこく用いたソフィスト的詭弁が、アイロニカルなものであるとすれば、ソクラテースがソフィスト以上のソフィストであるということは、少しも逆説的ではないのだ、と⁽⁸⁰⁾。

本論考において私は、こうした見方の基にあるアイロニー理解の誤りをはっきり掴もうと努めてきた。この目的のために私は、西洋のすべての言語における、“irony”に相当する生きた言葉の、——そして、キケローの“*ironia*”はそうした生きた言葉の最初のものであるのだが——、第一の、現実の意味に立ち返ったのである。哲学者によって発明されるすべての用法（、ここにはキルケゴールがヘーゲルから取り出した「無限の絶対的否定性」という用法も含まれる⁽⁸¹⁾、）がそこから派生しているところの、この第一の用法においては、アイロニーは単に、私たちが言おうとする（mean）こと[A]と反対のこと[non-A]を言う（say）ことによって、言おうとすること[A]を表現するということの意味するにすぎない。これは私たちが始終行っていることである、——子供ですらそれを行っている、——そしてもしもそれを行うことを選択するならば、私たちは、まさにそれを選択したことによって、欺瞞的に語るという選択肢を失っているのである。そうではないと考えるのは、*ironia*を*eirōneia*と誤解し、誤解することで、前者が後者から発展してきた、その過程を逆転させ、ソクラテースに対して、彼に名声をもたらした主要な諸資格の一つを拒むことなのである。その資格というのは、彼の西欧的感性への貢献ということであり、これは、西欧の道徳哲学に対する彼の貢献と同様に記憶すべき業績なのである。

しかしこの探究の過程で、私は当初当てにもしていなかった或る事実を偶然に発見することになった。それは、プラトーンの手紙の描くソクラテースの人格（*persona*）は、キルケゴールの天才とフリードリッヒの学殖がともに読み込んだものを私たちが説明する際に手助けしてくれる、という事実である。私が精査してきたあの小さな証拠の切れ端から、いかにしてソクラテースは欺こうと意図することなしに欺くことができたのか、ということが理解できるのである。いま、君は若いアルキビアデスであって、ソクラテースに言い寄られているのだと仮定してみよう。その場合、ソクラテースの謎かけのアイロニーをどのように解釈するかは決定は、君自身の考えに委ねられているであろう。もしも君が道を誤り、彼がそれに気づいたとしても、彼は君の誤りを追い払うためには指一本たりとも動かさないかもしれない。まして、その誤りを君の頭から叩き出してあげなければならない、と感じることもないかもしれない。もしも彼のアイロニーが些細な事柄について言われたのであれば、こんな事態に立ち至っても、君は何も重大な害悪を被らないだろ

う。しかしそれが最重要の事柄についてのアイロニーであったとすれば、どうであろうか。——彼は君を恋しているのか、それとも恋していないのか？ 彼は「君を恋している」と言う (says), しかしその言葉は謎であって、つまり、ある一つの意味に取るか否かを君の自由に任せておいて、しかし彼の意図としては (are meant), 君にそれとは別の意味に取ってほしいと望んでいるというような、そんな謎をソクラテースは投げかけているのだ。そして彼は、君が道を間違えていると気づいても、君をそのままに放っておくのだ。君は何と言うだろうか。僕が真実に気づくということにあなたは関心がないのだ、とは、君はよもや言わないだろう。そうではなく、君はこう言うだろう、あなたは別のことにもっと関心があるのだ⁽⁸²⁾, それは、もしも僕が真実に気づくとすれば、僕は僕一人の力でそれに気づかなければならないということなのだ、と。

プラトンのソクラテース的対話篇において道徳的自律の概念が明るみに出るということとは決してない⁽⁸³⁾。しかし、だからといって、この概念はそれらの対話篇におけるソクラテースの最も深いところにある、最も深遠な事柄であることを止めているわけではない。また、それがソクラテースの諸々の道徳的関心事のなかで最も強いものであるということにも何ら変わりはないのである。彼の考えの基礎にあるのは、私たちの話すほとんどすべてにおいて、私たちは解釈の負担を聞き手の側に押しつけている、という事実である。ある文を語るとき、私たちは、その文をどのように受け取るべきかについて、注釈を付け加えるということとはしない。そうした仕方では聞き手から解釈の負担を取り除くことはできないであろう。というのも、それは終りのない仕事になるだろうから。つまり、それぞれの注釈は同じ問題を引き起こし、一つの注釈にはまたそれについての別の注釈が、というように、注釈は無限に存在しなければならなくなるであろうから。ソクラテースのアイロニーは、すべての有意義な意思疎通に内在する自由の負担を認めている、という点でユニークなのではない。それは、あの「[解釈を予測する] ゲーム [sc. 話し手の言葉を聞き手がいかに解釈するかを、話し手が言い当てるという賭け] に西洋の他のどの哲学者よりも多額の金銭を賭けた、という点でユニークなのである。ソクラテースは、彼と私たちがそれによって生きなければならない道徳的知識は、かつて理解されたり、否それどころか想像されたりした、ありうべき道徳的知識とはまるで違っている、と言っているのではない。彼は、ただ、呪わしいことに、自分には道徳的知識は無い、と言う (say) だけである。そして彼は、そのことは何を意味し (mean) うのかというパズル [sc. 謎かけのアイロニー] を自分で解くようにと、私たちを放り出すのである。

[注]

- (1) この論考は元々ケンブリッジ大学古典学部 B Club のために執筆され、コーネル大学

- (Townsend Lecture) とコロンビア大学 (Trilling Seminar) において口頭発表され検討されてきたものである。本論考を現在の形にまとめる上で私はいくつかの論評から影響を受けた。それらの論評をお寄せくださった方々に感謝申し上げる。
- (2) *Institutio Oratorica* 9.22.44. ほとんど同じ定義が 6.2.15 と 8.6.54 にも登場する。
- (3) Muecke, 1969 : 15-19 の諸見本は、——それらの中のいくつかは申し分のない珠玉の見本ではあるのだが——、この種類に属する純粋の実例をまったく含んでいない。この優れた書物にも、また別の優れた書物、Booth, 1974 にもアイロニーのこの次元は気づかれていないのだから、まして探索されているわけではないのである。
- (4) εἶρων が古典期における悪口の言葉 (*Schimpfwort*) であったことについては、Ribbeck の画期的な論文 (1876 : 381ff.) を参照せよ。後続の研究がこの論文に取って代わるものではないので、私はそれら諸研究を論評することは控えておく。
- (5) Dover (1968) *ad loc.* in his invaluable edition of the *Clouds*.
- (6) ἡ γένει γενναία σοφιστική (「家柄の高貴なソフィスト術」), 231B.
- (7) *N. E., E. E., M. M.* においてソークラテースは、そのような人間として言及されている。しかし恐らく *Rhet.* ではそうではないであろう。ここでは εἰρωνεία は「軽蔑されるべき」特性 (καταφρονητικόν, 1379b31-2) と見なされている。
- (8) 同一のものが中核に存している。つまり、アリストテレスでは προσποιήσις ἐπὶ τὸ ἔλαττον, *N.E.* 1108a22 が、テオフラストスでは προσποιήσις ἐπὶ τὸ χεῖρον, 1.1 が存するとされるのであって、それゆえ、いずれの場合にも装うこと (ないし、見せかけ (pretence)) が存しているのである。
- (9) 「そのような人間はまむし以上に避けられなければならない」 (1, *sub fin.*).
- (10) 「彼は聞いているのに聞かなかったと、見たものを見なかったと、同意したことを全然覚えていないとうそぶく」 (1.5)。
- (11) 「彼は裏では攻撃し面と向かってはほめるだろう」 (1.2)。Friedländer (1958 : 138) が、テオフラストスは εἰρωνεία を描写しても、「価値評価していない」と言っているのには呆れてしまう。ここに引用した言葉や前の注で引用した言葉以上に強い否定的評価がありうるだろうか。ソークラテースを圏外に置くことによって、テオフラストスはふつうの見方からすれば当然浴びせても構わないと思われる軽蔑を憚ることなく εἶρων に浴びせている。
- (12) 君にとって最も危険な敵は、「物静かで本心を隠し (dissembling), 平気で悪事を働く人間である (οἱ πρᾶτοι καὶ εἴρωνες καὶ πανούργοι)。彼らは平静な外見の下に邪悪な意図を隠している」 (*Rhet.* 1382b21)。
- (13) Bloom (1968) と Grube (1974) は “irony” が εἰρωνεία と εἰρωνεύσοιο の意味であるとしている。Shorey (1930) も “irony” が εἰρωνεία の意味であるとしている (彼は *Symp.* 216E に言及しているが、この箇所については後に論じる)。しかし彼は後者

の訳語については説明もなしに “dissemble” に変えている。彼は英語の “irony” の意味について混乱し支離滅裂になっているのではないかと私は思っている。というのも彼はそれが “dissembling” を意味すると解しているのだから。

- (14) 一応満足できる翻訳については, Lindsay, 1935 (“slyness”), Cornford, 1945 (“shamming ignorance”), Robin, 1956 (“feinte ignorance”)を調べてみよ。

“shamming”, “feigning”がここでの意味であることは, コンテキストから全く明らかであろう。

- (15) Plato, *Ap.* 38A1 への彼の注において:「(プラトーンにおける) εἴρων, εἰρωνεία, εἰρωνεύομαι は, ソクラテースに対しては彼の敵対者たちだけが用いていて, つねに好ましくない意味を有している。」Burnet は *Ap.* 38A1 の εἰρωνευόμενον を見落としてはいいない。Allen の翻訳 (1984) においても同じ意味:「あなた方は, 私がずる賢く不正直であると考えるだろう。」しかし Burnet は『饗宴』のアルキピアデースの演説におけるこの語の注目すべき二つの用例 (後に論じる) をいずれも無視している (或いは「誤解している」?)。

- (16) 1948: 451, n. 1:「[プラトーンにおいて][イロニーが] ソクラテースに述語づけられる場合, それは常にソクラテースを非難する述語である。*Smp.* 216E のアルキピアデースもまた, ソクラテースを非難して εἰρωνευόμενος と言っている。」彼も Burnet (前注) も, Ribbeck の *R.* 337A についての議論に何らの注意も払わなかった。しかし Ribbeck は, この箇所の εἰσθυῖα εἰρωνεία の意味を正確に捉えている。

- (17) 「プラトーンではそれは, トラシマコスのような辛辣な敵対者やソクラテースが誰に対しても自分の本当の性格を偽るそのやり方に怒った振りをして見せる人 (*Smp.* 216E, 218D のアルキピアデース) の口から話されるときには, 悪い意味を保持している」(Guthrie, 1969: 446)。Guthrie は, *Ap.* 38A1, οὐ πείσεσθέ μοι ὥς εἰρωνευόμενον を付け加えることもできたであろう。ソクラテースは, 神託物語から得た「命令」とこの物語そのものが不正直な虚構として受け取られるであろうと予期している。しかし Guthrie は *G.* 489D-E (次の T2 のテキストについて論ずる予定) にまったく注意していない。そして *R.* 337A の εἴρων-は *Smp.* 216E また 218D のそれと同じ意味であると想定している。

- (18) 私の訳は Croiset & Bodin, 1955 に従っている。Woodhead の “You are ironical” は, [a] ではまずまずの訳ではある。というのも, ここではソクラテースの嘲笑はじじつアイロニカルであるから。(それは話者が真実であると信じていることとは反対のことを語るという形式を取っている。) しかし [b] ではそのような訳文は全く採れない。というのも, カリクレースのソクラテースへの嘲笑はアイロニーではないから。Irwin の “sly” もよくない。というのは, 言葉の調子やコンテキストには特に “cunning, wily or hypocritical” (*O.E.D.* の “sly” の説明) といったところはないから。[a] の意味につい

での Ribbeck の理解の仕方でも退けねばならない。彼は εἰρωνεύῃ に「言い抜け、ごまかし」を読み込んでいるが、それは理解できないことである。しかし [b] の εἰρωνεύου についての Ribbeck の評釈（「偽りの、不誠実な、ほめ言葉を使用することによる嘲笑の一つの形式」）には全く悪いところはない。その評釈は、ここでの εἰρωνεύεσθαι の用法を Pollux 2.78, καὶ τὸν εἴρωνά ἔνιοι μυκτῆρα κάλουνσι と、そして 諷刺詩人 Timon のソークラテースへの言及 (fr. 25D, ap. D.L. 2.19), μυκτὴρ ῥητορόμυκτος[,] ὑπατικὸς εἰρωνευτῆς とに結びつけているが、これは正しい。Ribbeck は [b] について次のように述べている。「したがって、その当時の εἰρωνεύεσθαι についての理解は一般に想定されているよりももっと広がったに違いない」(loc. cit.)。彼はこの「もっと広い」用法をよりはっきりと特定すべきであっただろう。εἰρωνεύεσθαι は、欺瞞を少しも仄めかすことなく、嘲笑そのものを表現するために用いることができるということを彼は把握しなかったように見える。そうでなければ、「言い抜け、ごまかし」が [a] の意味になるであろうか？

(19) Long はこれをアリストテレスの論考だとした（ベルリン版アリストテレス著作集にこれを含めた）。その後この論考の著者は、テオフラストスと同時代の Anaximenes of Lampsacus とされるようになった（Loeb Classical Library, 1973 所収の H. Rackham による翻訳に彼が付けた序論 (p. 258 ff.) を見よ）。Lampsacus を著者とするのはまったく不確かなことであるが、しかし彼よりもずっと後にこの論考が成立したということもまたありえない。その言語的また政治的な雰囲気は四世紀アテナイのそれであって、イソクラテースの *Technē Rhētorikē* を反響させている。この論考の中の 8 個の断片は編者によって三世紀前半のものとされたパピルスに現れている（Greenfell & Hunt, *Hibeh Papyri* pt. 1, no. 26, pp. 113 ff.）。

(20) Cope, 1867: 401 ff. は、この書の推奨する説得の形式は、「トリックやごまかしや言い抜けの体系であり、正邪あるいは真偽に対するまったくの無関心を現わしている」と述べている。

(21) ある言語において、アイロニカルな言語行為が出現することと、この言語行為をアイロニカルと記述する手段が利用できるということは無関係であることを、読者は想起すべきであろうか。アイロニーを使用するということは、それについて思索することとは別のことであって、遠い昔から為されていたのである。私たちは一人の穴居人が仲間堅いステーキを差し出して、「この柔らかいのをちょっとやってみろよ」と言うのを想像することができるだろう。ホメーロスにも例は十分にある。（エウマイオスが「乞食」に対して [言う]。「もしもわしがお前さんを殺したとすれば、人びとの間でわしのよい評判が立ち、立派な奴だと言われることだろう。」*Od.* 14.402. 彼が言っているのはそれとは正反対のことである。）

(22) 前掲の注 15, 16, 17 を見よ。

(23) *Smp.* 216E4.への彼の注釈を参照。「εἰρωνεία は (‘irony’ とは異なって) 『見せかけの謙遜』, 『装われた無知』 のことである。 *Rep.* 337A ではトラシュマコス は (全然友好的でない口調で) 『ソクラテースのいつもの εἰρωνεία』 と言う。」ドーヴァーは εἰρωνεία が二つの箇所と同じ意味で使用されていると想定している。

(24) “Urbane is the dissimulation when what you say is quite other than what you understand. ... In this irony and dissimulation Socrates, in my opinion, far excelled all others in charm and humanity. Most elegant is this form and seasoned in seriousness.” T5 の *dissimulatio* を “dissembling” と翻訳するときには、(私たちは辞典に十分な裏付けがあるので、そのように訳すかもしれないが、) 次の点に留意しなければならない。それは、英語の “dissembling” によって通常伝えられているような、他人を欺くために隠すという意味は、キケローが注目している言い回しには欠落しているという点である。他人を欺く話し方は彼が *urbane dissimulation* と呼ぶものではないであろう。「そのような都会風に雅に隠すことにおいては、君の話の全体的な調子から、君が思っているのと違うことを話しながら真面目にふざけている (*severe ludens*) ということが明らかである」 (*loc. cit.*)。

(25) これは非常に徹底的な変化であったので、キケローやクインティリアヌスの視野から、その元の意味を覆い隠すほどであった。その隠蔽は全面的であるように思われる。*ironia* についての彼らの発言からは、私たちは、彼らのよく知っているテキストにおいてその原語の εἰρωνεία が悪口の言葉 (*Schimpfwort*) であったとは決して推測できないであろう。ソクラテースという範型の権威はキケローにとって決定的なものであったから、彼はその語によって、単に、「ソクラテースに見出される・・・あの *ironia*, すなわち、ソクラテースがプラトーンやクセノフーンやアイスキネースの対話篇のなかで効果的に活動させている *ironia*」 (*Brutus*, 292) を理解している。そしてクインティリアヌスが「*ironia* はある人の生涯全体を特徴づけることがある」と述べるとき、彼はソクラテースに、そしてソクラテースだけに言及しているのである (*Inst. Or.* 9.2.46)。

(26) 彼は自分では曲った議論を教え込むことはしないが、そうした議論の求めには、これを迎え入れている。彼はこの曲った議論とその反対の議論 (δικαίος λόγος と ἄδικος λόγος) の両方を店舗に常備していて、客はいずれでも選ぶことができる。Cf. Nussbaum, 1980 : 48 : 「劇の最初から最後までソクラテースは、正義を教授し弁論の技の正しい使用法を強く勧めるということは試みない。彼の態度はよくても中立的であり、最悪の場合には他人を欺くことを許容している。」

(27) *Clouds*, 359 (Arrowsmith [1962] 訳) .

(28) キルケゴール (Kierkegaard, 1965, notes 58-9 & 64) は、カリクレースとの対話 (1.2.36) やヒッピアースとの対話 (4.4.6) のなかでアイロニーが関いていることに注

目している。

(29) ここではキルケゴールの嗜好が、いつもは間違いを免れているのに、彼を見棄てている。この逸話は彼を「うんざりさせる」ものであった。

(30) 彼は彼から離れることのできないアポドーロスとアンティステネースの名前を、そして彼をしばしば訪れるテーバイのケベースとシミアースの名前もまた挙げている (3.9.17)。

(31) この作品のアイロニーを鋭く批評したものとして、酒宴での振舞いについての Higgins, 1977 : 15-20 のコメントを見よ。同じ資料を詳細に論じたものとしては、Edelstein, 1935 : 11-12 も見よ。ただしまったく奇妙なことに、彼女はそれがアイロニーであるとは気づいていない。

(32) 私はこの用語をここで、そしてこの後も本書を通じて準専門用語として使用し続けるつもりである。私はこの用語を Vlastos, 1985 : 1 ff. at 30 において導入したのだが、そこに立ち戻ることにする。

(33) そこでキケロー (*Brutus* 292 : cf. 前注 25) がプラトーンの対話篇に加えて、(アイスキネースと) クセノフォンの対話篇におけるソークラテースの *ironia* について語っているのも理解できる。しかしキケローが *ironia* を描写するために向うのはただプラトーンの対話篇だけであり、そしてそうすることにおいて、彼が注視している(「万事について無知」 *omnium rerum inscium* である) ソークラテースは、アイスキネース的人物ではあったかもしれないが、クセノフォンの人物ではありえなかったということは明白である。Aeschines fr. 11 を見よ。(これは後出 additional note 1.4 に翻訳され第3章の T21 としても引用されている。)
「私はそれをとおして、それを彼に教授することにより、彼を益することのできるような、知識は何ももたない。」

(34) これら二つの複合的なアイロニーと、それらに密接に関連する第三の複合的なアイロニーについては、additional note 1.1 を参照せよ。

(35) このように主張するための基礎となるテキストについては、Vlastos, 1985 (pp. 6-11) に相当詳しく述べてある。

(36) 彼は、自分は「真の政治術を企てている (ἐπιχειρεῖν : cf. additional note 1.1, n.21), ただ一人のアテナイ人とは言わないまでも、少数のアテナイ人の一人である」(*G.* 521D), と言っている。この言葉は、ある人が政治術を実践しているか否かは、その人が自分の同胞市民の道徳的性格のうえに効果を上げているか否かによって判定される、というようなコンテキストにおいて発言されている (*G.* 515A)。いずれのテキストも additional note 1.1 で論じられる。

(37) このヒッピアースの言葉は第3章の T24 では、その全てが引用されている。

(38) それにまたクセノフォンにおいては、ソークラテースの問答の相手を務める者是谁も、ソークラテースは εἶρων であると明言することも、また暗に言うことも決してな

い。そこではソクラテースは、友人であれ敵であれ、彼らの上に、プラトーンのアлкиビアデースの上に引き起こしたような、つまり、いつものように特徴ある仕方アイロニカル（後出 T9 の εἰρωνικῶς の意味。これについては T9 に注釈する際に論じるであろう。）であるという印象を生ぜしめる者としては決して描かれていないのである。クセノフォーンの『饗宴』でソクラテースが、自分は取持ち屋であり、美しい容貌をしていると語りかけている相手の人間は、勿論、彼がアイロニカルに語っていることは理解している。しかし、彼らは、これをソクラテースのいつもの習慣的な特性として認識しているということは全く示唆しないのである。

- (39) しかし第 5 章第 II 節も参照せよ。
- (40) ソクラテース描写という観点から見た（、文学的成果を分かつための）二つの時期の間の多種多様な相違点については、第 2 章で論じられるであろう。
- (41) 216D (=T15) : 「彼は何も知らないし、万事について無知である。」
- (42) 第 2 章第 III 節で論じられる。特にその T22 についての注釈を見よ。
- (43) additional note 2.1 (『国家』第一巻の構成) を見よ。
- (44) 同様に『ファイドーン』でも、真正のソクラテース的材料が、これまた同様に真正のプラトーンの哲学的議論を導入し (57A-64A), そして仕上げる (115A から最後まで) ために使用されている。
- (45) Guthrie, 1969: 446.
- (46) 前注 23 を見よ。
- (47) εἰωθότως. この語については、前出の T1 における εἰωθυῖα εἰρωνεία を参照せよ。
- (48) 217A5-6, 「僕は自分の若さの盛りに自惚れていた。」
- (49) Cf. W. Ferguson in the *Cambridge Ancient History* v (Cambridge, 1935), 263 :
「彼は注目を集めるほどに美しかったので、アテネの男たちから、他の社会においてなら並はずれて美しい女性に対して与えられるのが通常であるところの評価と特典を受けとった。そしてその尊大さを彼は非常に魅力的な振舞いで飾ったので、彼が神々にも男たちにも、老人にも権威にも、後見人にも妻にも尊敬を表わさなかったときも、その行為の無法ぶりはしばしば忘れられ、ただ行為者の外見や雰囲気のみが思い出されるだけという有り様であった。」
- (50) *Prt.* 309A; *G.* 481D; *Chrm.* 155C-E; *Men.* 76C1-2.
- (51) Xen. *Smp.* 8.2.
- (52) クセノフォーン (*Mem.* 3.11.3) は貴重な情報を加えてくれる（、これはプラトーンからは決して得られないものである）。それによると、ソクラテースは女性の美に対しても敏感であった。肌もあらわなテオドデーを見てソクラテースは（自分自身と仲間を弁護して言っている）、「僕らが目にしているそのものにどうにかして触れてみたい、僕らは興奮し (ὕποκνιζόμενοι), 恋いこがれたまま (ποθήσομεν) 立ち去るだろう。」

- (53) 但しここでは、役割が逆になっている。つまり少年のほうが追いかけているのであって、追いかけているのではない。
- (54) T12 の最初のこの部分は上に T9 として引用された。
- (55) *II. 6. 234.*
- (56) *pp. 31-2 & additional note 1.1.*
- (57) 『ラケース』におけるソークラテースの行動を参照せよ。ソークラテースは道徳的知恵を需めに応じて与えるようにと頼まれるが、そのような道徳的知恵を彼は強く否認している。「彼はそのようなことがらについての知識は持っていないし、[それについて] あなた方のうちのいずれが真実を話しているかを判断する能力も持っていない。彼はその種のどんなことがらの発見者でも学習者でもなかった」(186D-E)。しかしラケースが教えを求めて自分自身をソークラテースに提供するとき(189C)には、ラケースは歓迎を受ける、——それは、他の誰かから知識を注いでもらうためではなく、ソークラテースとの「共同の協議と探究」(συμβουλευεῖν καὶ αὐσκοπεῖν ——前綴りは問題となっている関係の協働的本性を二度続けて伝えている)に参加するためである。
- (58) Guthrie, 1975 は伴うと取る。
- (59) 限りなく貴重なものを顕わにするために、——それは俗衆の眼には隠されているものだが、——「完全に開く (open up)」というイメージは、216D6, 216E6, 222A でも繰り返される。Martha Nussbaum は、プラトーンによって使用される限りでのこのイメージは「本質的に性的」(1986: 189)であると考えるのであるが、しかし彼女のこの考えを支持する根拠を、これらのテキストのどこにも私は見出すことができない。性的関係において恋人が有する独特の形式の知識が獲得される、という同氏の思想には深遠な真理が存している。このような知識への私たちの欲求においては、「性的要求と認識論的な[知識の]要求とは結合され、明らかに分離できない」と彼女は言っている(1986: 190)。しかし、プラトーンのテキストにはかかる思想をそこに読み込むことを保証してくれるようなものは何もない。アルキピアデースは 216D-E において、彼の飲み仲間に、ほんとうのソークラテースが性的関係を通して、彼や彼の仲間に顕わにされる(「完全に開かれる」)であろうとは示唆していないのである。
- (60) ソークラテースの *ironia* のキケローによる記述に現れる *dissimulatio* についての私の注釈(前出注 24)を参照せよ。
- (61) 前出注 50, 51 と Dover, 1978: 154-5 とにおける参照箇所への指示を見よ。
- (62) あるいは “namesake” (ἐπωνυμίαν, *Phdr.* 250E3) また “likeness” (μεμιμημένον, *ibid.* 251A)。
- (63) これは「節度のない馬」の性欲を強く刺激して、この馬をして性の悦びを求めて騒ぎ立てるように仕向ける、と述べられている (255E-256A)。
- (64) この 肉体的関係 (physical intimacy) は、『ファイドロス』のテキストでは極め

てはつきりとしているのに (cf. Vlastos, 1974 and 1981: 39), プラトーンの *erōs* について説明がなされる際にそれが指摘されることは滅多にない。Wilamowitz, 1948: 368-9 (cf. 前出注 16); Gould, 1963: 119; Guthrie, 1975: 405 においては, それは無視されている。初期の翻訳はプラトーンの言葉の真意を曖昧にし, その意図を隠蔽している: Jowett では, συγκατακείσθαι は “embrace” に, ἐν τῇ συγκοιμήσει は “when they meet together” になっている。

(65) クセノフォーンにおいては, 魅力的な若者との身体的接触に対するソークラテースの恐怖心は強迫的なものであった。(可愛らしい顔にキスすることは「ただちに自由人であることをやめて奴隷になること」である, *Mem.* 1.3.11. 彼の裸の肩が美しいクリトブロースの裸の肩に一瞬でも触れようものなら, 彼はまるで「野獣に咬まれた」ような影響を被った。彼の肩は何日もひりひり痛んだ, *Xen. Smp.* 4.27-8.) しかるにプラトーンにおいては, ソークラテースは美しい少年と肌を触れ合うことへの恐怖を全く表わさない。アルキビアデースと裸で相撲を取るということは「しばしば」起きたことである。もっともそれは, ただアルキビアデースの主導のもとでのことに過ぎないのではあるが (*Smp.* 217C)。そしてプラトーンの対話篇には, ソークラテースが「恋人の」若者との間での身体的愛情表現を促していると思わせるような箇所はどこにもないのである。

(66) 第2章の注 42, 43 を見よ。

(67) Cf. *Xen. Mem.* 2.6.22: ソークラテースは「若さの盛りの少年がもっている性的魅力を悦ぶような人たち」に対して, 「それを拒まれている人びとを苦しめないために」少年の魅力に抵抗するように勧めている。

(68) *Chrm.* 155D-E: 「そして僕はキュディアースが *erōs* の様々な道についてどれほど適切に理解しているかを考えてみた。彼はある人に美しい少年に関する助言をして, 次のように警告したのだ, 『子鹿をライオンに近づけ過ぎてはいけない, ライオンは子鹿の肉を食い尽くしてしまうからね』と」。また *Phdr.* 241D: 「狼が子羊を好むように, 恋する者は少年に恋をする。」

(69) *Xen. Smp.* 8.19: 大人の男は「自分のためには快楽を, 少年にはもっとも恥ずべきことを取っておく。」 *Ibid.* 21 (一部は E. C. Marchant にならった翻訳): 「少年は女性のように男性と性の悦びを共にするのではない。少年は素面の状態で恋に酩酊する相手を眺めている。」

(70) Cf. additional note 1.3 on ἔρως καλός.

(71) それはプラトーンのソクラテス的対話篇でも, またクセノフォーンのソクラテス的対話篇でも, そのように描かれている。また, Aeschines Socraticus によるアルキビアデースの名前を冠した対話篇 (fr. 11 Dittmar: その全体は additional note 1. 4 に引用し論ずることにする,) で, ソークラテースのアルキビアデースへの ἔρως に言及する箇所も, プラトーンやクセノフォーンと異なる話をしているのではない。

(72) Michael Ignatieff, in his review of M. Foucault, *Histoire de la Sexualité* in the *Times Literary Supplement*, 28 Sept., 1984, p. 1071.

(73) ただレセノフォンによれば、そうではない。というのも、身体的接触へのあの強迫的な恐怖心 (cf. 注 64) が不安の徴候であることは確かであろうから。この点については、他の点についても同じであるが、クセノフォンの証言がプラトンのそれと食い違ったときには プラトンの証言を採るのが賢明であろう。ソークラテースとの直接の交わりは、プラトンの場合のほうをはるかに親密であったと信ずべき十分な理由があるからである。

(74) ソークラテースの ἔρως のこの根本的な特色は、キルケゴールからフリードに至る、私の知るそれについての全ての説明において見落とされてきたものである。キルケゴールはロマン的空想のために、ソークラテースの ἔρως のうちに「熱情的混乱」を読み込んでいる (1965:88)。プラトンの「真実の恋」(le véritable amour) についてのフリードの議論は極めて洞察力に富むものであるが、それでも “l'Érotique socratique-platonicienne” (vol.2 of *Histoire de la Sexualité*, 1985) というハイフン付きの表現に残存している盲点を露わにしている。プラトンの ἔρως の孕む不安は『ファイドロス』のなかに脈打っている。戦車を駆る御者と良いほうの馬は、悪いほうの馬が彼らに対して禁忌とされている極悪非道の所業を強要することのないようにと「甚だしく悩む」(254A)。彼らはただ、「その穢れなき玉座についている」(254B) 美の形相の幻が折りよく回帰してくることによってのみ救われる。

(75) Cf. *Prt.* 309A1-D2: ソークラテースは、自分がアルキピアデースの若さの盛りを「追いかけて」きた (παιδραστία における求愛の標準的な隠喩) ことを認めつつ、次いでそれをアイロニーのなかに包んでしまう。

(76) この問題は第 5 章でもっと詳しく論じられるだろう。

(77) 「ソークラテースはプロタゴラスを騙して、彼からあらゆる具体的な徳目を奪い取った。各々の徳目を一に還元することによって、彼はその徳目を完全に解消してしまう。しかるにソフィスト術とは、彼にこのことを為さしめる力のうちにあるのである。したがって、ここにはソフィスト的対話術によって産み出されるアイロニーと、アイロニーのうちに安らうソフィスト的対話術とが同時に存在している」(1965: 96)。

(78) O'Brien, 1967. 私たちのソークラテース理解への彼の貢献も、脇道にそれてしまっている。というのも、著者はソークラテース的対話篇に存するアイロニーの使用法を誤った仕方で適用し、ソークラテースの最も根本的な学説のいくつかを、進んで放棄しようとしているからである。例えば、もしも *Prt.* 352D4 の καλῶς が、その言っていることの反対を意味しているとすれば、ソークラテースの *akrasia* 不可能説の全体が失われるであろう。アリストテレスの証言を引用したところで無駄であろう。この証言に対しては、アリストテレスもまた問題のアイロニーを理解しそこなっていると反論するこ

とで対応できるだろう。

(79) いちばん最近では, Charles Kahn (1983: 75 ff.)。彼はソークラテースがポーロスを「騙し」て反駁したこと (90) について語っている。この議論の私自身の分析 (Vlastos, 1967: 454 ff.) の彼による記述, すなわち「ソークラテースはポーロスを騙した」という記述を, 私は受け入れないだろう。私は, ソークラテースの議論が故意に誤ったものであるとの示唆に対して反論したのである。私は第5章第III節でこの問題に戻ることにする。

(80) 前注77のキルケゴールを参照。

(81) Kierkegaard, 1965: 276 *et passim*. ソークラテースのアイロニーについての彼の論じ方は, 目もくらむような神秘化によって絶望的なまでに混乱している。そうした神秘化に誘惑されたために, 彼は自分では注釈を付けているのだと言っているが, プラトーンのテキストのなかに空想的短編物語風の気まぐれを発見するのである。「アイロニーに必然的に伴う偽装と神秘性 …… それが帯びる無限の同情, 捕まえどころのない名状しがたい理解の瞬間, 直ちにそれにとって代わる誤解への不安」等 (85)。

(82) この論考の以前の版では私は, 「恋の不在」 (failure of love) を説明のために提出していた。Don Adams は当時コーネル大学での私のセミナーの参加者であったが, 彼は私に, この説明の方向が誤りであることを納得させてくれた。ソークラテースがアルキピアデースに真実を自分の力で苦労しながら突きとめてほしいと望むということは, この若者への彼の恋と完全に両立しうる。

(83) 伝存するソクラテース文献のどれにおいても, αὐτονομία が道徳的な (あるいは政治的な) 面に応用されることは決していない。

参考文献

- Allen, R. E. (1984). *The Dialogues of Plato* (translation with analysis), vol. 1, New Haven
- Arrowsmith, William (1962). *The “Clouds” of Aristophanes*, translated with introduction and notes, Ann Arbor
- Bloom, A. (1968). *The Republic of Plato*, translated with notes and an interpretive essay, New York
- Booth, Wayne C. (1974). *The Rhetoric of Irony*, Chicago
- Burnet, John (1924). *Plato’s “Euthyphro”, “Apology of Socrates” and “Crito”*, Oxford
- Cope, E. M. (1867). *Introduction to Aristotle’s Rhetoric*, London
- Cornford, Francis M. (1945). *The “Republic” of Plato*, New York

- Croiset, A., and Bodin, L. (1955). *Gorgias and Meno in Platon, Œvres complètes*, vol. III, part 2, text and translation, Paris
- Dover, K. J. (1968). *Aristophanes, "Clouds"*, Oxford
- (1978). *Greek Homosexuality*, Cambridge, Mass.
- (1980). *Plato Symposium*, Cambridge
- Edelstein, Emma (1935). *Xenophontisches und platonisches Bild des Sokrates*, Berlin
- Friedländer, Paul (1958). *Plato*, translated by H. Meyerhoff, vol. 1 : *An Introduction*, London (2nd.edn., 1969)
- Foucault, M. (1985). *The History of Sexuality*, vol. II : *The Use of Pleasure*, translated by R. Hurley, New York
- Gould, Thomas (1963). *Platonic Love*, London
- Grube, George (1974). *The Republic of Plato*, translation, Indianapolis
- Guthrie, W. K. C. (1969). *History of Greek Philosophy*, vol. III : *The Fifth-Century Enlightenment*, Cambridge
- (1975). *History of Greek Philosophy*, vol. IV : *Plato, the Man and His Dialogues : The Earlier Period*, Cambridge
- Higgins, W. E. (1977). *Xenophon the Athenian*, Albany, N. Y.
- Irwin, T. H. (1979). *Plato's "Gorgias"*, translated commentary, Oxford
- Jowett, B. (1953). *The Dialogues of Plato translated into English with Analysis and Introductions*, 4 vols., 4th edn., Oxford
- Kahn, Charles (1983). "Drama and Dialectic in Plato's *Gorgias*", *Oxford Studies in Classical Philosophy* I
- Kierkegaard, Soeren (1965). *The Concept of Irony*, translated by Lee Capel, Bloomington, Ind.
- Lindsay, A. D. (1935). *The Republic of Plato*, Everyman's Library, London
- Muecke, D. C. (1969). *The Compass of Irony*, London
- Nussbaum, Martha (1980). "Aristophanes and Socrates on Learning Practical Wisdom", *Yale Classical Studies* 26 : 43-97
- (1986). *The Fragility of Goodness*, Cambridge
- O' Brien, M. J. (1967). *The Socratic Paradoxes and the Greek Mind*, Chapel Hill
- Ribbeck, O. (1876). "Über den Begriff des *Eiron*", *Rheinisches Museum* 31 : 381 ff.
- Robin, Léon (1956). *Platon : Œvres complètes*, translated with notes, Paris
- Shorey, P. (1930). *Plato, Republic*, vol. 1, translated with introduction, London
- Vlastos, G. (1967). "Was Polus Refuted ?", *AJP* 88 : 454-60
- (1974). "Socrates on Political Obedience and Disobedience", *Yale Review* 63 : 517-34

(1981). *Platonic Studies*, 2nd edn., Princeton

(1985). “Socrates’ Disavowal of Knowledge”, *Philosophical Quarterly* 35 : 1-31

Wilamowitz, Ulrich von (1948). *Platon : Sein Leben und seine Werke*, 3rd edn. by Bruno Snell, Berlin

Woodhead, W. D. (1953). *Plato, Gorgias*, translated in *Socratic Dialogues*, Edinburgh

(Gregory Vlastos, *Socrates Ironist and Moral Philosopher*, ch. 1. Socratic irony, Cambridge University Press, 1992, pp. 21-44.)

(※) この翻訳の第一稿は、2010年度後期、2011年度前期「哲学演習(一)」のために作成し教材としたものです。「文字どおり」拙い訳文を読んでもくれた学生諸君に深く感謝する。このたび上梓するにあたり、再度検討を加えました。その際、本学部教授富澤直人先生から英語学上の、また英文の読み方に関するご教示をいただきました。記して厚く御礼申し上げます。【了】